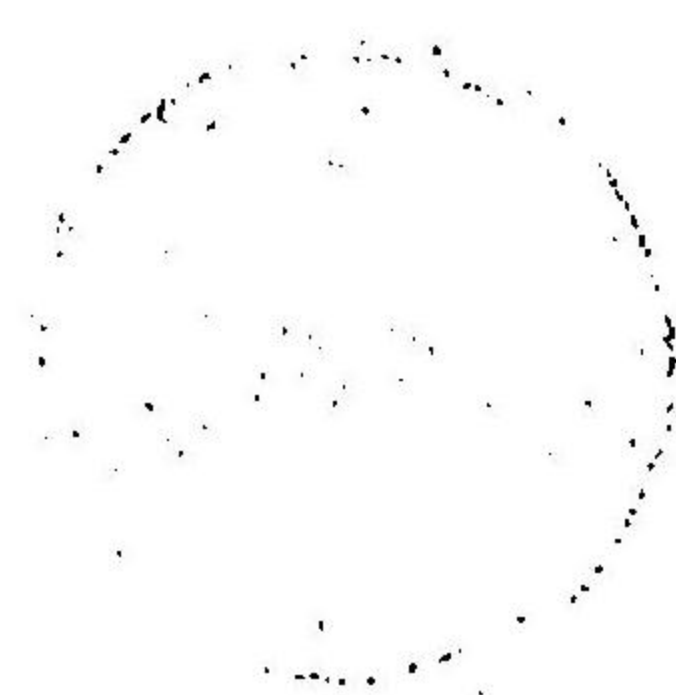
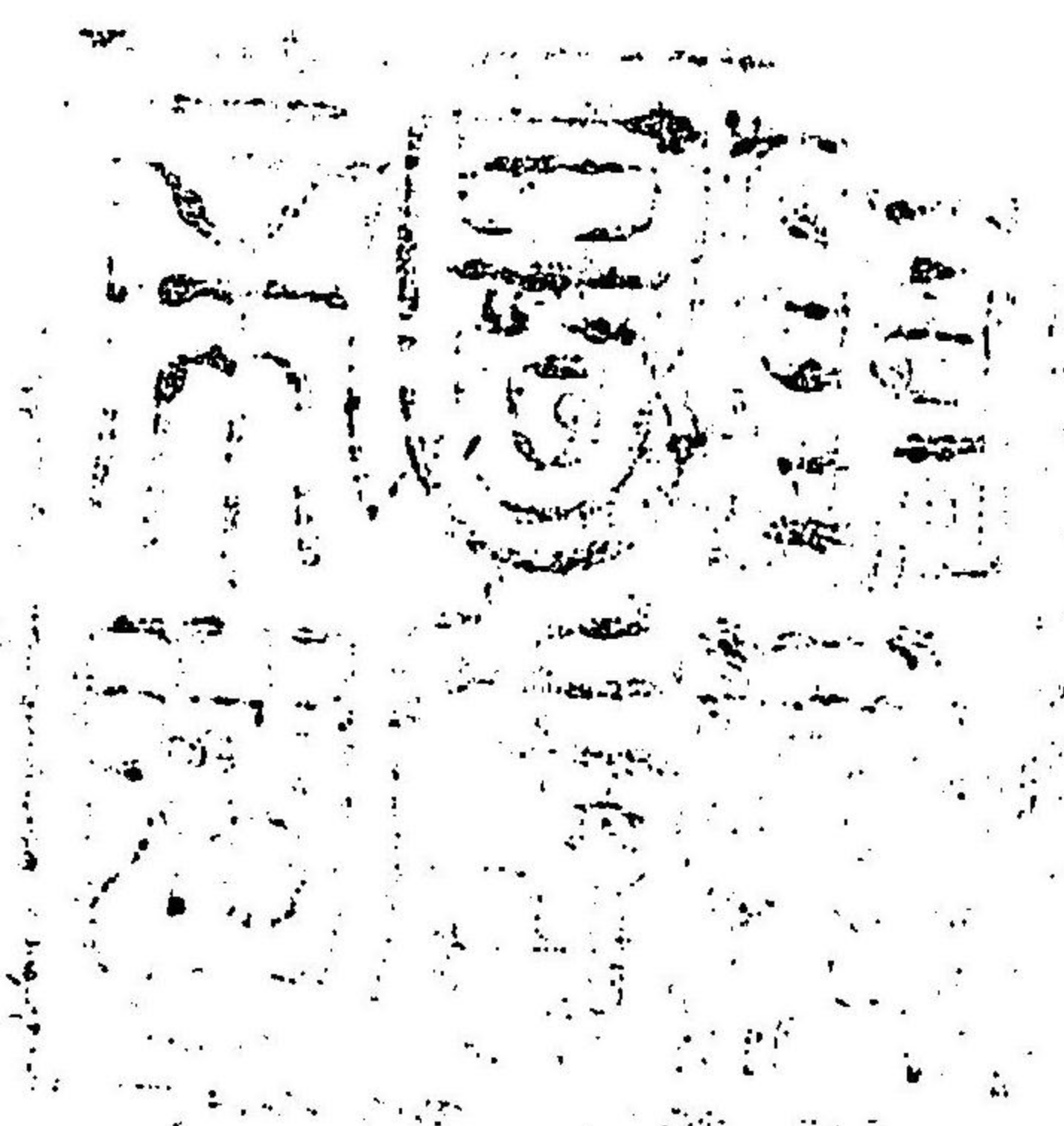
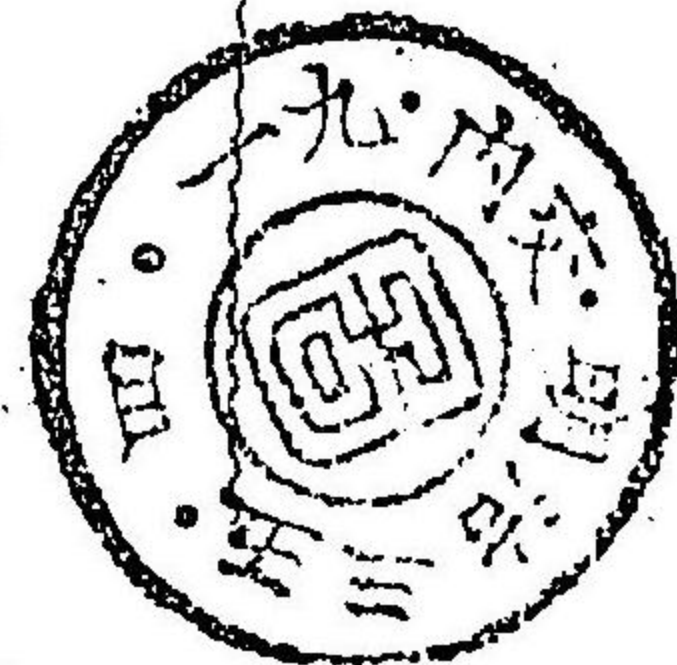


特62
237

丹羽三郎著

金曲正文章活法

東京誠進堂發行



今躰文章活法序

文體の支離滅裂して、紊亂雜駁なるは、今日より甚だしきは無し、されば初學の士は、其の何れに法とり、其の何れに則とる可きか、迷はざらんを欲するも得可からざるなり、彼の國文家なるものを師とせんか、擬古の死文となり、且つは和習に流るゝの恐れあり、謂ゆる時文家なるものを倣はんか、漢習に拘はり、若くは洋習に泥むの弊を生ず、此の亂れて麻の如き迷路の指針となるものは、唯だ此の今體文章活法なるべ

し、其の説く所は簡易にして明晰、而も能く其の陋を
矯め、其の弊を正し、專ら初學の實習に適するを主
とす、修文の士を益する蓋し鮮からざるべし、予其の
稿を讀んで茲に所思を附記す

明治壬寅初春

枕流迂夫識

凡例

一 近來文章の體、頗ぶる錯雜にして、雅俗混交、初學の
士の大に迷ふ處なり、本書は些か其の方針を定む
るに便せんが爲め、古今文章の沿革より、文體の變
遷に説き及ぼし、以て當代の文體として、最も可な
るものを選択せるものなり。

一 文章は平易にして趣味あるを要す、本書の主とす
る處亦た此の點に在り、文章は流暢にして、美なら
ざるべからず、本書亦た此の點に重きを置けり。

一作例は古今大家の作にして、前述の趣旨に適合せるものを採擇せり、但し書簡文は編者の自作せるものなり。

一本書は今體文章の作法を指示するの目的なるも、編者の學識淺薄なるを以て、不備不齊の點尠ならず、讀者乞ふ幸に之れを諒とせよ。

明治三十五年一月

編者誌す

今體文章活法目次

第壹章 總則……………一

- 第壹節 言語と思想……………一
- 第貳節 文章……………四
- 第參節 文牀の種類……………一二
- 第肆節 擬古文……………一九
- 第伍節 古文と時文……………二一
- 第陸節 普通文と美文……………二三

第貳章 文法……………二九

- 第壹節 假名遣……………二九
- 第貳節 名詞……………五一
- 第參節 代名詞……………五一
- 第肆節 動詞……………五二

一作例は古今大家の作にして、前述の趣旨に適合せるものを採擇せり、但し書簡文は編者の自作せるものなり。

本書は今時文章の作法を指示するの目的なるも、編者の學識淺薄なるを以て、不備不齊の點影なからず、讀者を不幸に之れを諒とせよ。

明治三十五年一月

編者誌す

今時文章活法目次

第壹章	總則	一
第壹節	言語と思想	一
第貳節	文章	四
第參節	文牀の種類	一二
第肆節	擬古文	一九
第伍節	古文と時文	二一
第陸節	普通文と美文	二三
第貳章	文法	二九
第壹節	假名遣	二九
第貳節	名詞	五一
第參節	代名詞	五一
第肆節	動詞	五二

第五節	形容詞	五八
第六節	副詞	五九
第七節	後詞	六〇
第八節	接續詞	七二
第九節	感詞	七三
第十節	活用	七六
第十一節	五階活用表	九六
第十二節	係結	一〇五
第三章 普通文一七			
第一節	普通文の組織	一一九
第二節	普通文の沿革	一二八
第四章 美文學一六三			
第一節	修養と練磨	一六六
第二節	取材と着想	一七三

第三節	文詞と裝飾	一八九
第五章 散文と韻文二〇八			
第一節	散文作法	二〇八
第二節	論說文	二〇九
第三節	記事文	二一〇
第四節	敘事文	二一九
第五節	命意	二三四
第六節	林段	二三七
第七節	段落	二四〇
第八節	文詞ノ用法	二四六
第九節	推敲と刪正	二五七
第十節	文章改潤の法	二六〇
第十一節	記事の採擇	二六三
第十二節	摸擬の弊	二六七
第十三節	漢習と洋習	二八二

第六章 散文作例

第一節	天文	三三九
第二節	地理	三六七
第三節	時令	三九一
第四節	動物	四一三
第五節	植物	四三二
第六節	邸園	四五九
第七節	人事	四六六
第八節	變災	四七四
第九節	日記紀行	四八五
第十節	雜部	五八二

第七章 書簡文

第一節	書簡文の沿革	六一七
第二節	書簡文の種別	六二一

第三節	書簡文の弊	六三〇
第四節	書簡文の作法	六三六
第五節	用語の種別	六五五
第六節	書簡文組字法	六八二
第七節	冒頭乃ち前文	六八三
第八節	事實乃ち本文	六九九
第九節	結尾乃ち末文及び留書	七〇四
第十節	追啓乃ち副書	七〇九
第十一節	日附及び署名	七一〇
第十二節	脇付	七一六
第十三節	書式乃ち餘白及び字配	七一八
第十四節	書牀	七二〇
第十五節	封狀及び其書式	七二二
第十六節	端書の書式	七二九
第八章	書簡文作例	七三一

第一節 男子之部……………七三一
 第二節 女子之部……………七八六

今體文章活法目次畢

今體文章活法

第一章 總論

論

第一章 第一節 言語と思想

丹羽三郎著

凡そ自己の思想を他に通じ、自己の感情を他に傳へて、日常百般の用事を辨じ、自他相互の間の満足を與ふるものは、實に吾人々類が受け得たる特種靈妙なる言語の作用に因るものにして、若し吾人が此の言語を發する能はざらんか、人類世界の快樂の大部分は感受するを得ず混沌蒙昧、禽類と殆んど異なることなく、到底萬物の靈長たるの價値はあらざるべし。

然れども吾人が此世に生れ出づるや、直にこの靈妙なる言語を自由に發働し得べきものにあらず、たゞ纔かに一種の聲音を發し得るに過ぎず、蓋しこれ身軀の發育完全ならざると共に、思想も亦た幼稚にして單純なるが爲めのみ、故に身軀の漸次發育するや、思想も亦た次第に發育し、連れて言語も漸く巧妙に至れるものなり。

されば吾人がこの特種なる天與の言語を、自由自在に發作し微妙の働きを爲さしめんと思はゞ、能く其思想を養成し、一言一語といふとも他人が充分に會得し得られ満足し得らるべきやう、平易に簡單に、明晰に流暢に、深く其精神に感動を與ふることに勤めざるべからず。

既に述ぶる如く、言語は各自の思想を顯はすものなることは明らかなりとして、次に其所謂思想とは何ぞやといふに、思想とは吾人が耳にて聞き、目にて見、鼻にて嗅ぎ、口にて味ひ、皮膚に觸るゝ等に依りて得るところの種々の感覺を區別判斷するをいふなり、而して此の思想なるものも亦た人間特有のものにして、人間を稱して萬物の靈なり

とする所以のものは、其理全く茲にありといはざるべからず、何となれば彼の禽獸と雖ども、吾人と同じく五官を有せざるにはあられども、彼等はたゞ外物を知覺するのみにして、依つて以て其理を推し、其是非を判斷すること能はず、而して其之を能くするものは、獨り吾人々類のみなればなり。

此の如く吾人は思想といひ言語といひ、特種靈妙の賜ものを賦與せられたれども、之を以て世事百般の用を辨ずるには、未だ以て充分なりとはいふべからず、何となれば此の特種なる言語を以て、此靈妙なる思想を顯はし感情を訴ふるには、音聲の届くべきところならざるべからず、故に其働きは大きなるが如くなるも其區域は甚だ狭きものなり、試みに思へ、言語は、互に相接し相交る人にあらざれば用を爲すべからず、土地を隔て時間を移しては用を辨すべからず、すべて音聲の届くべき限りのところ及び發言する速時にあらざれば、他をして聞知せしめ感動せしむることを得ざるものなればなり。

されば言語のみにては、吾人の思想感情をとて一時に天下幾千萬の同胞に通じ得べからず、又其人に接するにあらざるよりは一言一話をも聞知せしむるを得難く、況てや吾人が抱負する主義思想を、遺漏なく千百年の後までも残し傳へんことは、決して出来得べき限りにあらざるべし。

さて此の不便を除きて、吾人の思想感情を容易く滿天下の同胞に傳達し、又一回の面識だも無き人、若しくは遠く隔りたる人に對し、直接對話を爲すが如く、細大洩らさず其用務を問答し、或は我が抱負せる主義思想を、數百千年の後までも残し傳へんとするには、其の作用を爲さしむべき機關なかるべからず、茲に於てか文字及び文字を以て綴れる文章の必要を見るものなり。

○第二節 文 章

吾人が思想を他に通じ感情を他に訴ふるは、靈妙なる言語の働きに依

るものなれども、其の區域の甚だ狭きが故に、充分に其の働きの利用し難く、其の働きを廣且つ大ならしめんには、文字及び文章といへる機關を要することは、前節に述べたるが如し、故に言語は思想の結果にして、文字及び文章は思想及び言語の結果なりといふべきなり。されば言語と文章とは、其の利用の區域に於てこそ大小廣狹の別あれども、其の働きは決して異なるものにあらず、たゞ之れを口に發して耳に聞かせ以て心に感せしむると、之を字に書きて目に見せしめ以て心に感せしむるとの別あるに過ぎず、すなはち相接するの人に對しては言語を以てし、相隔つるの人に對しては文章を以てするの差あるのみ。

此の如く言語と文章とは同一の働きを爲すものなれば、吾人の思想感情は言語を以て言ひ顯はすにあらざれば、文章を以て書き示すものなり、故に文章を書くにはすべて我が思想のみ書き我が思想のみ表彰すべきものなるに、世人はやゝもすれば、他人の文章を讀み辭句の巧

みなるものを見れば、それを材料となさんとするが爲めに、多少事實に相違することあるも強ひて其の辭句を用ひ、徒らに文辭の流麗典雅を衒はんとするより、何時しか已れが抱持せる思想を暗中に葬り去り、他人の思想を代表する如き奇怪を見ること往々少しとせず、斯る現象を呈するは何の故ぞといふに、蓋し其の思想を養成せざるが爲めに其の辭藻の豊富ならざるに因るのみ。

左はいへ思想を養成し辭藻を練るといふも、成るべく多く事物の現象を見聞し、成るべく多く古今の文章を読み、それを自己の胸中に貯へ、事に臨み時に應じて之を我が文章に利用することなれば、時として他人の言葉をも借り來らざるべからず、又時としては他人の思想をも借り來らざるべからざるも、爲めに已れが主義抱負を狂ぐることなく、事實に背反するが如きことなきやう心掛くべきなり。

言語にてもあれ文章にてもあれ、已れの意見を縦横無盡に言ひ顯はし書き示さんと欲せば、豊富なる思想を有せざるべからず、而かせんに

は思想を養成し辭藻を練るの功を積まざるべからず、されどそれは容易く出來得べきことにあらず、世上の事々物々皆な順序あり次第あり、其順序を踏み次第を追ふて、はじめて成就を見るものなれば、文章も亦た初學の時より流麗典雅なるもの、簡潔巧妙なるを望むは無理なる譯柄なれば、簡單平易の境より漸次精微幽玄の域に進むべきなり。

然るに近時初學者が文章を作り習ふを見るに、その摸範とするところ徒らに高尚なるものを採るが故に、情も無く味も無き、夢の如く烟の如きものを作り出して得々たるは、如何なる心得違ぞや、前にも述べ如く、物すべて順序あれば、文を學ぶにも初めは先づ普通平易の文體を作り習ひ、これに熟したる後に漸を以て優美森嚴なる美文を學まば、知らず識らずの間に巧妙の域に達するを得べきなり、左はなくして思想も豊かならず辭藻にも富まずして、漫りに高尚なるものを摸範とする時は、其の綴り成すところ多くは飯空に陥り、實際に遠ざかり、其文はあだかも美服を纏はせる京人形の如く、皮相外形のみ奇麗

に見ゆれば、血肉も無く腦髓も無き空文となり了るべきなり、而も此等は猶ほ初學者にしては上乘の作といふべく、其甚だしきものに至りては、或は古文にのみ泥みて、それを模範とし標準とするより、今は世に用ひられざる古語、若しくは古には有れども今は無き事實、又は古と今と其の器物の形も名も異なれども、そを使用する点に於て同じき物には、殊更に其異なる古名稱を用ふる等、兎角假空虚偽なる材料を用ふるものあり、或は現在世上一般に普通せる言葉、若しくは事物等の名稱をも、古文に用ひられたる例なきは、文章には用ふる能はざるものと思ひ誤れるもの等あるは、歎すべき弊習といはざるべからず、而して此等の弊習は初學者のみに止まるかといふに、強ち初學者のみに限れるにあらず、一かどの學者社界に於ても、種々の弊習ありて、たとへば和文家流にありては、文辭すべて古文雅文に傾き、事物の名稱等に至るまで成るべく古雅ならんことに力め、漢學者流にありては、文辭すべて漢文直譯體に傾き、事物の名稱文法等に至るまで成るべく

支那風ならしめんとし、洋學者流にありては、文辭すべて洋文直譯體に傾き、事物の名稱文法等をも成るべく洋風を摸擬せんとするより、自然文體にも殊別を生じ、後進の士も亦た之れに倣ふて得々たるを見るに至れるなり。

左に今泉定介氏が今日の普通文の淆亂せるを慨きて、其の希望の一端をも述べられたるものを、抄録して讀者の参照となすべし、其の言に曰く、

何人もしれる如く、文章はもと思へることを、筆に寫すものに過ぎざれば、強ちに六かしき文字を、用ひたるをのみよしとするは、實にをこのわざなり、世には漢文をのみめでたきものと思ひて、この文は簡潔平易なり、この文は奇峭幽遠なりなどいひて、なみくの人には、よきふしの見いでられぬばかりの、文章をのみ、よしとするものあるは、かたはらいたきことになん、されどおのれの、簡潔平易は、文章の妙といはざるにあらず、又奇峭幽遠も、一種の妙な

るべし、唯強ちにこれのみを、文章の妙とするは、かたゐに似たりといふにあり、今日の如く、文運はいや開けて、百般の學科いよく、精しくなりもて也かば、之をしるす文章も、亦精密ならざれば叶わまじきわざなり。もし此時に奇峭幽遠、簡潔平易をのみ、文章の妙なりとしたらんには、いかで理化學やうのこみいりたることを、さだかにかき寫すことを得べけんや、覺束なき事ともなり、もと支那と、吾國とは、語源を異にして、かれは單音語なり（一音にして一語をなすもの是れなり）、我は重音語なり（數音にして一語をなすもの是なり）、かく語源を異にしながら、文字を同じくすることなれば、我邦にては、語尾のかはりは、かな文字にて寫さるべからず、もし語尾の變化を寫さるときは、いはゆる専門家にあらざれば、よみ得ること難し、又單音語を以て寫せば、文章はおのづから幽昧にながれ易く、重音語を用てかける文章は、おのづから精密にわたることば、單音語國なる支那の文章と、重音語國なる西洋の文章とを、

くらへ見て知ることを得べし、さる便宜なる重音語國なる我邦にて、單音語國なる、支那文字を用ひしは、いと愚なることなり、されば二千年來用ひ來れる文字を退けんとするは、げに至難の業なれば、一朝一夕の事にあらず、一時世にかしかましかりし假字の會、羅馬字會も共に雲とすぎ、烟とさえたるやうなれば、漢字を斥くことはしばらくおき、なるべき耳遠き漢字を用ひざるこそ今日の急務なれ、さて文章の氣勢修辭は、その人の伎倆と好尚とによりて、巧拙あるものなれば、もとより定むべき事ならねど、大躰の標準に至りては、よそに見なして過べきことにあらず、つらく今之文章を見るに、種々の躰あり、又おのく長短ありて、手本とすべきものいと稀なり、故に今日にありては、一躰に偏せずして、諸躰の粹を取り、卑俚ならず、佶屈ならず、なるべく流暢圓滑の文勢を得んことをこそ務むべけれ、されど何人も、この躰裁によるべしとて、たやすく行はるべくもあらねば、學者だちたる人によりて、この文躰を

盛にする風潮を起したき事なり、又男女文を異にするは、その弊ありてその益を見ず、今のまゝにては、男をして女の文によらしむるも、女をして男の文に従はしむるも、共によるしきを得ざるに似たり、是點より考ふるも、作文一般の標準を示すことは、いよしく今日の急務なり、あはれ演劇に落語に、その改良を謀れるもの多きに、ひとり文章はながれゆく世にまかせつゝ、之をたださんずる人の乏しきはいかに、(日本之少年)

以上述べたる如く、我が邦今日の文牀は、多岐多端にして不統一なり然れども又略ぼ歸着せんとする所あるもの、如し、その好果を收むると否とは、今泉氏の言葉の如く、學者だちたる人特に未來の文學者なるべき、青年諸子の相結合して負擔すべき任務なりとす、

○第三節 文牀の種類

前にも屢々述ぶるが如く、言語は思想を言ひ顯なすものにして、文章

は言語若しくは思想を寫し出すものなるは、今更らに喋々するの要なし、斯くの如く言語と思想と文章の三者が、相關聯して離れざるものなるが故に、言語と思想とに於て二様あらざる以上は、文章にも之れなかるべき理なるに、方今我が國に行はるゝ文章には、大凡五種の文牀あるを見るは、豈に奇なる現象ならずや、而して其の文牀とは、謂ゆる和文牀、通俗牀、言文一致牀、漢文直譯牀、洋文直譯牀これなり。世界は廣し邦國は多しと雖ども、此の如く多種の文牀ある國は、蓋し之あらざるべし、試みに思へ同じ言葉を用ひ同じ文字を用ふる一國民にして、其の結果たる文章をかくも多種に分ち用ふるは、奇異なる現象といはざるを得んや、世人は之れが爲めに直接に痛痒を感せざるを以て、或る一部分の人を除くの外は、誰れしも之れを奇異なりとせず、之れを意に介せずして、冷淡に看過すれども、この錯雜にして不統一なる結果は、學術の進歩を妨ぐることを、決して少なしといふべからざるなり。

然れども此の錯雜不統一を來たせる所以のもの、蓋し其の原因なかるべからず、抑も我が邦には上世文字なく、故に國文のあるべき筈も無く、應神帝の朝に百濟の王仁が論語及び千字文を貢上りたるより、始めて文字及び文章我が邦に傳はれるなり、それより二百有餘年の間は、漢文のみを用ひ來りしも、元明帝の御世に至り、太安麻呂が撰みたる古事記を見るに、少しく日本化したる如くなるも、矢張り漢文に外ならず、もつとも此の時代には漢字のみなれば、漢文跡なりしは固より異しむに足らず、其の後ち假名文字の制作されしより、其の音の單純なるからに、漢字と違ひて國語を寫すに便なるが故に、今の世にいふ國文すなはち和文の端緒は開けて、種々日用普通の文辭は漸く民間に行はれ、殊に紀貫之が漢文をもて骨子とし、これに衣するに麗はしき國語をもてして、種々の著作をものせしより、假名文も亦た法則格調儼然として備はれるに至れるなり。

然らば則ち謂ゆる和文は全然漢文の日本化したる者たるを思はざるべ

からず、況して漢文は和文に先たちて行はれ、假字は漢字を省略して成れるもの、尙ほ且つ紀氏の法則を漢文に取りて假名文を一振し、謹嚴整正なる和文を興したるをや、之を要するに、漢文ありて後ち和文あり、すなはち一分れて二となれり、又この二を折衷して時文すなはち普通文は起る、茲に於てか二又合して一となれり、而して漢文と和文とは尙ほ依然として左右に對峙し、これに普通文を加へて恰も鼎足の勢を爲す、されば普通文は二種の古文より生し、二種の古文はもとこれ一種の漢文なるに外ならざるなり。

以上に述べたる如く、和文跡及び普通文跡ともにもと漢文より分合したるものなれば、我が國文章の源は謂ゆる漢文に外ならざるなり、然れども和文家の稱道する和文跡は、紀氏が漢文を骨子とし假名文を一振して文法を謹嚴優美に制定したるものなれば、其當時の事物にはよく適合し、古人の思想感情を寫すには恰當なりしも、時世の推移と共に事物の進化は免るべからず、故に文章も亦た從つて變遷するは理に

於て然るべきことならずや、さればこの古代の和文體にのみ依頼して、文明今日の現象を悉く記載し得べき、よしや記載し得らるゝにもせよ、その迂遠なること固より言ふを待たず、されば古代の文學は、専門學として模範として參考として學ぶべく究むべきは勿論なれども、唯これのみを以て今日の國語國文の標準として、和文學とは古文の模造をなす事なりと誤解するに至りては、迷へるの極みならずや。

さて又漢文體は、我が國文の産れ出てたるもとなれば、我が國文と稱するも不可なきが如くなるも、既に仮名文の制定せられたる以上は、其の譯讀方も成るべく國語の文法を用ふるが至當なるに、只管漢文を作り學ぶに便なるべくし、其の體は次第に極端に流れて、遂には譯讀方にまで「矣」「焉」などの文字を用ふる至り、甚だしきは我が邦固定の土地、官位、人名までも支那風に模擬し京都を洛陽と稱し、江戸を武陽といひ、從五位下を朝散太夫、町奉行を市尹、物部徂徠を物茂郷、服部南郭を服元喬といへるが如く殊更らに變更するに至りては、これ

亦た迷へるの甚だしきものならずや。

次に洋文直譯體を論せんに、すべて外國語を我が國語もて直譯するはいと至難の業にして、些かも遺漏なからしめんとするには、國語に合はざる無理なる讀み方となり、また國語の文法に合はざるとすれば、勢ひ原文の文法の幾分かを枉げざるべからず、されば洋文の譯讀方は區々にして一定せざるを以て、國語に及ばず弊害は、代名詞の濫用、主格名詞の誤用、或は不定冠詞を妄りにつかふなどは、何れの譯文にも多く見るところなり、然れども漢文の動詞に語尾の變化なく、過去現在未來の區別も、自他命令の區別も著しからざる如くならず、故に洋文直譯體は、漢語に近きもあり、俗語に近きもあり、又國語にも近きものあり、若しこの直譯方にして前に述ぶる弊害を除きて文法を正さば、普通文すなはち時文に適合するものといふべきか。

次に近時言文一致體と稱するものあり、これは初學者の文を作るには、やゝ適當せるが如きも、謂ゆる其地方の方言を用ひて文章を作るもの

なれば、他の地方の人には通用せざるものあり、故に其區域たる最も狭くして、到底普通文に適用するの價値なきものなり、されば我邦今日の時文としては、普通文すなはち通俗文の外に求めて得べからざるなり。

左はいへ現今の普通文すなはち通俗文は、完全無罅のものにして、我が日本純粹の國文といふを得べきか、其の一定の格ありて不變のものといふを得べきか、否な決して然りといふ能はざるなり、見よ甲者の認めて通俗體と爲せるものも、乙者より見れば直譯體の範圍内を脱せざるものとし、丙者の認めて通俗體と爲せるものも、丁者より見れば和文體の範圍内を出でざるものとし、未だ儼然たる形式の制定せられたるものあらざるが故に、如何なるものが純粹の通俗體と定むべきかは目下の問題にして、これを確定するは容易の事にはあらざれども、各種文體の弊を除きて自然普通の言語を集め、我が國從來の文法に違背せざるやう、漸次革新の方法を講せば、我が邦の文章茲に始めて一

定すべきなり。

○第四節 擬古文

我が日本は古へを尊ぶの國なり、古へを尊ぶ固より悪しき事にはあらず、然れどもいかに古へを尊ぶがよきとて時世に適せざる事までも、わざ／＼古代に摸擬するは偏執といふべきか誤れるといふべきか、見よ今日の漢文ならびに國文の姿たる、作者が徒らに古代の言語文章の典雅優麗なるに心酔して、殊更らに古代の言語を用ひ、古代の文法文格に依り、すべて古代の風調にもものして、いたく今日の言語風調と同じからず、たゞ／＼古めかしく作り成せども、古人のものせる眞正の古代文字にあらずして、古代の文體に摸擬して今人のものせるなれば、古文と言はゞ古文といひ得られざるにはあらざれども、これを擬古文と稱するは當然なるべく、はた已に社界一般に普通せざるものすなはち世に亡び失せたる言語文體を學ぶものなれば、これを死文と言ふも

不可なきなり、今消息文もて一例を擧げんに、足代弘魚が、人々の花見に物しけるにおくれしといふ消息文の中に、

(前略)さて何よけん、み肴もどめ侍るに、鮑さだをかやうの物なきをいかにせん云々、

といへる如き、此の文句は、催馬樂の詞に「みさかなには何よけん、鮑さだをか」とあるを取りて書けるものにて、當時さだをかといへる肴は、魚屋に尋ねたりとて料理屋に求めたりとて、よも知れるものあるまじ、されどかゝる類ひは、ひとり足代氏のみに限らず、學者の文はすべて然りといふも可なり、又漢文家の消息文に、詔言をいふに湯饑之罪とか、叩頭百拜とか、多罪、死罪など書き散らす如き、齊しく擬古文すなはち死文と稱すべきなり、かゝる無用なる文章は、明治の今日に於ては宜しく排斥すべき改新すべきものにして、特に眞摯切實を貴ぶ書簡文としては、不適當の極みなりといふべきなり。

○第五節 古文と時文

風俗は時世と共に推移し、言語は風俗に従つて遷り、文章は亦た言語に伴ひて變ることば、何れの國か然らざるものあらんや、然るに和漢文學者流の偏僻なる、其の文章を作るを見れば、依然古色に依倣して舊風を頑守す、こは固より文壇社界の弊習にして、成る程その文辭は美はしきには相違なきも、以て普通日常の用には供すべくもあらず、是を以て支那にありては歴代おのゝ時文といふもの行はれて、普通日常の用は必らず皆この時文に依り、古文は士大夫學者の玩娛に止まれるには至れり、我が邦は古來古文を尊ぶこと支那の如くに甚だしからず、其の時代によりて變遷し來りしが、徳川幕府の代となりて、一派の學者古學再興の擧ありしより、古文の勢力頗ぶる盛んに、其の風調靡然一世を吹きなひけ、謂ゆる國學者と稱するものは、皆この古文を書くこととなり、また支那流の古文も同じく此頃より文壇に跋扈する

に至り、以來文章は何れも皆古文のみとなり果て、學者の書ける文辭を見るに、支那の死文にあらざればすなはち我が國の死文に外ならず、今日に至るも猶ほ其の舊套を脱すること能はざるなり。

しかのみならず既に述べたる如く、支那には歴代の時文ありて、儼然古文と並び行はれつゝあるに、我が邦には殆んど時文と稱すべきものなく、僅かに時文とも見るべきものは、不規則不完全に變化し來れる書簡文と、稗史雜記の類とあるのみにして、これとても世の推移に従ひて、次第に言語と遠さかりゆき、實際には不適當のものとなれり。然れども時世はいつまでも、不完全なるまゝに過ぐるをゆるさず、況して社界交通の發達せる今日に於て、もはや擬古文すなはち死文もて、普通日常の用に應ずべくもあらざれば、遂に時は其の時に應ずべき文を要し、茲に漸く今日の普通文牀は起れるなり。

左はいへ是とても、儼然一定せる格ありて完全のものとは言ひ難きも最も實用に適し、はた自由自在に操縦し得べければ、我が邦今日の時

文と稱するも不可なく、漸次其の惡しきものを除き善きものを取りて、攻究一番せば、我が國文たるの價値を有するに至るべきなり。

○第六節 普通文と美文

文牀には種々の區別あれども、等しくこれ文章なり、而して其の主眼とするところは、古今と内外とを問はず、自己の見聞したる事々物々を、自己の思想と感情とによりて、これを筆に寫し出し、依て以て日常處世の用務を辨じ、或は人事百般の出來事を論議し以て自己の意見を世に公にし、或は古今内外時世の盛衰變遷を記してこれを後世に遺し、若しくは花鳥風月、山水の景勝等を叙して自他の娛樂に供じ、又は戯文、小説、詩歌俗謠等を作りて、或は世を諷し若しくは喜怒哀樂の感情を述ぶるにあるなり、されども以上の文章いづれも皆同一の筆法を以てする能はざるは、今更ら喋々するを要せず、故にこれを記するに就ては、事柄によりて自然の區別あるを見るは理の當に然るべき

ことどもなり、しかのみならず其の人の思想と感情と、時と場合によりて、同じ事柄を記するに於ても亦た異同あるは勿論なれども、今文章を作る大躰の目的を大別すれば、一は精細と簡單とを言はず、徹頭徹尾、平易にして明瞭に讀者の一見して理會し得らるべきを主眼とし、目的とするものと、一は一言一語も、典雅流麗に幽遠奇峭に飽くまで感情そのものをして、美妙の使者たらしむるを主眼とし、讀者をして或は泣かしめ或は笑はしめ、若しくは喜ばしめ憤らしむる等、反覆三誦して倦むことなからしむるを目的とするものとの二様に外ならず前者はすなはち普通文にして、後者は謂ゆる美文なり、さて普通文とは、日常通俗の文にして、消息文證書類をはじめ、新聞雜誌、法律規則、百科の書、其の他處世に必要な文書は、皆これに屬し、美文とは、美術的文章にして、物語文記行文等をはじめ、詩歌謠曲、稗史小説、戯文淨瑠璃などの文は、皆これに屬するものなり、試みに思へ、證書若しくは請取書を、いかほどの學者が書きたりさて、誰れしも美

文なりと言ふものはあらざるべく、又謠曲淨瑠璃の如きものを、眞摯切實なものせんに、誰れかはこれを讀んで感動するものあらん、されば此の二種の區別は、其の目的とする文題に依りて、自然に分かるものなるに、世人は何が故に互に淆亂せしむるか、抑も又其の區別に惑へるか、訝かしき極みならずや。

普通文と美文との區別は、其の目的とする題目に依りて、判然たるものなるは固よりなれども、右に述べたる二種の區別は、其の大躰を示したるものにして、兩者の極端を對比したるに過ぎず。故に強ち普通文には少しの裝飾をも要せず、美文は實際に違へることにも雅美なるが宜しといふにはあらず、又文章の中には普通文と美文との中間に屬せるものも無きにあらず、たとへば地理書の如き、東京は如何なる土地なるぞ、琵琶湖は如何なるところにあるぞといふを説き示に、東京は日本の帝都なり、琵琶湖は近江の國にある湖水なりと理會せしむるのみにては、文は乾燥無味にして、讀者をして讀んで面白み無きが

爲めに、半ばにして倦厭の情を生せしむるに至るべし、故にこれ等は事實と裝飾と相半ばせしむるを要すべきものなり、なれども地理書は地理書なり、事實と飾装と相半ばせざるべからずとするも、虚偽の裝飾は固より不可なり、要するに事實を主とするものと、裝飾を主とするものとの區別を理會せば、美文と普通文との區別は自から判然するものなり、されば以上の理を會得して、文を讀み文を草する時には、初めより其の普通文に屬するものか、或は美文に屬するものかの目的すなはち、區別を立て置きてものせば、いかに他の分子が入り來るとも、主義なく差別なき、混濼迷誤の文は出來るものにあらざるなり。初學の士が雅俗混亂の文を作るは、未熟なるが爲めに其の區別に迷へるものとして、恕すべきなれども、一かどの學者ふりたる人が、驚へべき奇怪なる文章をものして、得意然たるものあるを見聞すること屢々なり、もつとも此等の人は或る一派の國學者にあらざれば、偏僻固陋なる漢學者に多しとす、たとへば書簡文を認むるに、普通なれば「殘

暑猶嚴しく」「秋冷相催」など書きて事足るべきを、和文家は殊更に、ことしは取わけ殘んの暑さはげしう候て萩の上風あさともいまだ思はれ侍らずたのむ扇の風さへぬるく日々氷をいのちに暮し侍り云々。

一葉ちる桐の木の間の夕月夜ねざめにそよぐ萩の上風や、秋のけしきとなり候云々。

又漢文家は、

炎帝未だ駕を還さず、天地爲めに薰灼せられ、人をして甌中に在るの想あらしむ、云々。

今此の涼雨暑を洗ひ、秋氣方に動き、情景蕭爽なるに當り云々。など、一は雅文めかして長々しく言ひ立つるもの、一は佶屈にして議論文めかすもの、ともに書簡文として通俗文として適當なるべきか、詳かに思ひ見よ、書簡文なるものは、面談すべき事柄を、筆もて寫し所用を辨するものならずや、いま若し其の人に面會して、右に示せる

如き文意の口上を述べなば、聞く人は如何に思ふべきか、狂氣せしものと思はずば、戲言なりとして取合ふものなからん、さて此の口上にして笑ふ可きものとすれば、右の文句も亦た笑ふべきものならずや。上に述ぶるが如く普通文と美文との區別は、事實を主とするを裝飾を主とするとの二途に外ならずして、謂ゆる雅俗目的を異にする點にあるものなれば、此の理を會得して筆を執らば、混雜迷誤の不躰裁なる文章は、自然に跡を絶つに至るべきは、確く信じて疑はざるところなり。

○第貳章 文 法

凡そ文を作らんには、一わたり語法を辨へざるべからず、今その概略を順次に項を別ちて説き示すべし。

○第一節 假字遣

詞にては同音に似て而も文字を異にするものあり、其用ひ方を正しくするを假字遣といふ、又音韻には清音、濁音、音便、字音等あり。

清音 とは、すめる音をいふ。
 ひと(人)きつね(狐)にはどり(雞)ほしいわし(干鯛)はたおりむし(機織虫)などの如し
 濁音 とは、にぞれる音をいふ。

をぎ(萩)こずる(梢)はじかみ(薑)さるをかせ(松蘿)などの如し。
 又重濁音とは、重く濁る音にして、多く字音の「つ」「ん」などの下

にあり。
かっぱ(合羽)でんぶ(田夫)がっぺい(合併)しんべい(親兵)などの如し、

音便とは、或る音の上より下へ續きざまによりて、變化したるものをいふなり、故にすべて詞の上にあらはるはなくして、中或は下にのみあらはるゝなり、然して音便の假字は「い」と「う」と「ん」との類なり。

まして(況)を まいて とほし(遠)を とほい かくし(格子)をかうし いもびと(妹人)を いもうと ねがひて(願)を ねがうてなどの如し。

字音とは、漢字の聲をいふ事にて、其聲の儘を定まりたる假字遣によりて、假名文字にうつし出したるものをいふ。

あい(愛) きよう(行) はうこく(報國) じんちゆう(盡忠)などの如し、また字音の中、半濁音はまがふ事あらざれども、他はま

がひ易きものなり。

の 音 十 五

や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	
や	ま	は	な	た	さ	か	あ	お列
い	み	ひ	に	ち	し	き	い	ゑ列
も	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う列
え	め	へ	ね	て	せ	け	え	え列
よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	お列
喉音	唇音	輕唇音	舌音	舌音	齒音	齒音	喉音	

圖

わ行	ら行
わ	ら
ゐ	り
う	る
ゑ	れ
を	ろ
喉音	舌音

母音[●] は、喉より直に出で、他の發音を助くるものをいふ、母音に單母音、復母音の二種あり、單母音とは「あアアア」又は「いイイイ」の如く長く引き得る音にて「わ」行をいひ、復母音とは單母音の二つ「いゝ」「が」やとなり「うゝ」「が」ゐとなる如く、重なりものにて「や」行と「わ」行をいふ。

子音[●] は、齒、舌、唇、鼻の助けを借りて出で、母音の助けによりて發音し得るものをいふ、子音に單子音、復子音(拗音)の二種あり、單子音とは單母音に助けられて發音するもの、すなはち「か」「さ」「た」「な」「ま」「ら」の行をいひ、復子音(拗音)とは復母音に助けられて發音するもの、すなはち「きゃ」「きょ」「きゅ」「しゅ」「しゅ」「しゅ」「くゝ」の類をいふ、子音には又清濁の二種

あり、「かきくけこ」「さしすせそ」「たちつてと」「はひふへほ」は清む聲にして、之を清音と稱へ、「がぎぐげご」「ざじずせぞ」「だぢづでど」「ばびぶべぼ」は濁る聲にして、之を濁音と稱へ、「びぶべぼ」は重く濁る聲にして、之を重濁音と稱ふ。

(一) 清音[◎] にては「あ、か、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ」の十行の中、假字遣にて紛るべきものは「あ、は、わ」の三行なり、すなはち「あ」行にては「あ」を除くの外「い、う、え、お」の四個の假字は紛れ易く、「は」行にては「は、ひ、ふ、へ、ほ」の五個の假字は紛れ易し、「わ」行にては「う」を除く外「わ、ゐ、ゑ、を」の四個の假字は紛るゝなり、さて假字遣を一一々記憶せんこと容易ならず、これが簡易の方法は、其詞數の少き方をとりて記憶すべきなり。

(二) 濁音[◎] の假字遣ひは、五十音圖中、「か」行「さ」行「た」行「は」行の四行なり、其中「さ」行「た」行の第二三音すなはち「じ」「ぢ」「ぢ」は「ぢ」「ぢ」に誤り紛るゝなり。

(三)音便とは、連聲の便によりて、本音の他音に變ずるものをいふ。然してこの假音に二種あり、すなはち「し」と「う」となり、そは音便によりて「し」と呼ぶべきは、五十音中「し」と「し」の二音にて、「う」と呼ぶは、「か」「く」「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「ま」「み」「む」「り」「ぬ」「を」の十三音なり。

○「し」とかく例

きざき(皇后)を きざい うれしき(嬉)を うれしい たき
まつ(焚松)を たいまつ(松明) くらし(暗)を くらい の類
なり。

○「う」とかく例

かかぶり(冠)を かうぶり はくき(伯耆)を はうき はは
きぎ(箒木)を はうきぎ たびびと(旅人)を たびうと は
ぶりつ(法律)を はうりつ つかへまつる(仕奉)を つかうま
つる なほし(直衣)をなうし やまだ(山田)を やうた ひ

むか(日向)を ひうが かみつけ(上野)を かうづけ とり
で(取出)を とうで まるで(參出)を まうで まをす(申)
を まうす の類なり。
この他に長聲の音便あり、そは連聲の便により、ある熟語を發音する時、その間に「し」「う」「も」「ん」などの諸音を添へて呼ぶものをいふ。

○「し」を添へて呼ぶ例

しか(詩歌)と ししか けし(家司)を けいし と呼ぶの類をいふ。

○「う」を添へて呼ぶ例

ふし(夫子)を ふうし こせ(後世)を こうせ と呼ぶの類をいふ。

○「も」を添へて呼ぶ例

むか(六日)を むもか の類をいふ。

○「ん」を添へて呼ぶ例
 つかまいる(仕)を つか^んまつる まな(眞字)を ま^んなと
 呼ぶの類をいふ。

(四)通音とは、五十音中の同行または同列に、母音同士または子音同士の變じ通ふものをいふ。

○同行相通ふの例

あ	あ	い	い	お	お
か	か	か	か	か	か
さ	か	か	か	か	か
た	か	か	か	か	か
な	か	か	か	か	か
は	か	か	か	か	か
ま	か	か	か	か	か
や	か	か	か	か	か

ら 行 し^ろか^は(白河)を し^らか^は の類なり。
 わ 行 た^わや^か(窃窈)を た^わや^か の類なり。

○同列相通ふの例

あ	こ	こ	こ	の	の
い	か	か	か	か	か
う	が	が	が	が	が
え	お	お	お	お	お
お	と	と	と	と	と

右の中二名のもの連なりて、一名の稱呼となるものにつきては、一定の法則ある事なれども、言長ければこゝにいはず。

(五)略音とは、連聲の便より、有るべき音を抜き省くもの、すなはち自然に音のはぶかるゝをいふ、さて其全く略かるべきものは、五十音の中、「あ」行、「ら」行の諸音と、第貳韻の列なる「い」「き」「し」「ち」「に」「ひ」「み」「り」の八音となり、また同音の二個重なりたる時は、

其一音は自然にはぶかるゝなり。

○「わ」行畧音の例

はらあか(腹赤)を はらか あかいし(明石)を あかし
のうへ(尾上)を をのへ みちのおく(陸奥)を みちのく
の類をいふ。

○「ら」行畧音の例

まがりたま(曲玉)を まがたま かへるさ(歸路)を かへさ
それを(其を)を そを こゝろち(心地)を こゝち の類を
いふ。

○「い」列畧音の例

かりいほ(假庵)を かりほ ひきはぎ(引剝)を ひはぎ
したて(端建)を はたて かちどり(揖取)を かどり は
もり(掃部)を かもり はやびと(隼人)を はやと とみや
ま(富山)を とやま かりの(狩野)を かの の類をいふ。

○同音重複略音の例

かははら(河原)を かはら みづさは(水澤)を みさは の類
をいふ。

(六)添音とは、餘計なる音を添へ加ふるものをいふ。

(七)約音とは、連聲の便により、二音の自然に一音に歸するものにて、

或はこれを反切ともいふ、倒へばわがいも(吾妹)の約まりてわざも
となり、にぎたへ(和幣)の約まりてにぎてとなるが如し、かく約ま
るにも、しかるべき格ありて、音韻相通の正則に違ふ事なし、そは
大概「わ」行の五音、他の音に重なりたる時は、其二音自然に約まり
て、一音に歸するを例とす。

はらおび(腹帯)を はるび ぬすまふ(盜)を ぬすむ ぬき
ぎえ(雪消)を もきげ おぼしめす(思召)を おぼす ぬき
しきおり(錦織)を にしどり かのかた(彼方)を かなた

あさ。おみ(朝臣)を あそみ の類をいふ。
 (八)延音とは、約音の反對にて、一音を延べて二音となすものをいふ。
 この音は大概「か」「な」は「ま」「ら」の五行にあるものなり。
 いからす(怒)を いからがす きく(聞)を きかく
 (言)を いひけらく しらぬ(知)を しらなく しらぶ(調)
 を しらべる しむ(浸)を しみる の類なり。
 以上を示したる假字遣に就きて、一見その便を得せしめんが爲め、紛
 れ易きもの、中、數の少き方をのみ掲げて、其用ひ方を示すべし。

○第一表 わは

あわ	泡、沫うらわ	浦曲	ことわり	理	すわる	坐
あわつ	周章かわく	乾	こわね	聲音	たわやか	窈窕
あわたし	惶遽くわる	慈姑	さわぐ	騒	たわやめ	美婦
いわし	鰯くつわ	轡	さわやか	爽	たわら	儂
いわけなし	稚くるわ	廓	しわ	皺	たわむ	撓

この他の詞は、皆「は」の假字と知るべし。もつとも頭に來る「わ」音の
 詞は皆「わ」の假字なり、例へばわら(藁)わき(脇)の類をいふ。

○第二表 む

む	井、豕、猪、 居、蘭、	むなか	田舎	うなむこ	童女	なる	地震
むせき	堰	むやもふ	敬	かたむ	乞食	まゐる	參
むや	禮	むさらひ	臀	かもむ	鳴居	まどむ	團居
ゐる	居、率、坐、	あむ	藍	くらむ	位	もどむ	基
ゐざる	膝行	あぢさる	紫陽花	くわむ	鳥芋	おい	老
ゐのこ	豕、猪	いへる	家居	くれなる	紅	おいかけ	櫻
		いさらむ	小井	どのむ	宿直	かい	權

植 ことわざ 諺 しわざ 所業 はらわた 勝
 鷓 みるわ 酒食 よわし 野分 弱

ぬもり	嶋	垂鬚	とりぬ	華表	く	悔
さしづち	柘揆	むく	い	報		

みぎの表の「ぬ」の部に見えざる詞にして、頭に「い」の音を持ちたるものは、皆「い」の假字と知るべし。例へばいと(糸)いぬ(犬)いし(石)いかり(錨)いたる(到)いとふ(厭)いさむ(勇)などの類、また音便に轉じて「い」音となる詞「ひ」と「い」と讀むもの、外は、皆「い」の假字なり。例へばおいて(於)ささい(后)敲いて、聞いて、などの類、また右の表の「ぬ」の部および「い」の部に見えざる詞にして、語中または語尾に「い」音を持ちたるものは、皆「ひ」の假字と知るべし。例へばかひ(貝)こひ(戀)おもひ(想)あひて(對手)などの類なり、たゞし「ひ」音が頭に來りて、「い」と發音する詞は、一つもなきなり。

○第三表

う も ふ

得ぬぬううる……うれ 据ぬぬうすうる……すうれ

飢	ぬ	ぬ	う	うる	……	う	うれ	坐	ぬ	ぬ	う	す	うる	……	す	うれ		
植	ぬ	ぬ	う	うる	……	う	うれ	率	い	い	う	ひ	さ	うる	ひ	さ	うれ	
老	い	い	も	お	も	……	お	ぬ	榮	え	え	も	さ	か	も	さ	か	ぬ
悔	い	い	も	く	も	……	く	ぬ	聳	え	え	も	そ	び	も	そ	び	ぬ
報	い	い	も	む	も	……	む	ぬ	絶	え	え	も	た	も	……	た	ぬ	
肖	え	え	も	あ	も	……	あ	ぬ	生	え	え	も	は	も	……	は	ぬ	
癒	え	え	も	い	も	……	い	ぬ	冷	え	え	も	ひ	も	……	ひ	ぬ	
厖	え	え	も	お	び	も	お	び	ぬ	殖	え	え	も	ふ	も	……	ふ	ぬ
覺	え	え	も	お	ぼ	も	お	ぼ	ぬ	吼	え	え	も	ほ	も	……	ほ	ぬ
聞	え	え	も	き	こ	も	き	こ	ぬ	見	え	え	も	み	も	……	み	ぬ
消	え	え	も	き	も	……	き	ぬ	燃	え	え	も	も	も	……	も	ぬ	
越	え	え	も	こ	も	……	こ	ぬ	肥	え	え	も	も	も	……	も	ぬ	
肥	え	え	も	こ	も	……	こ	ぬ										

右の表の他はすべて「ふ」の假字と知るべし。たゞし詞の中と下とにあ

りて、「う」と書くべき動詞は、「あ」行「わ」行の下二段にて、「も」と書くべきものは、「や」行の上二段と下二段とに限り、また音便に轉じて「う」音となる詞は「ふ」を「う」と讀むもの、外は、皆「う」の假名なり、例へばさよう(清)うつくしう(美)かうづ(高津)とうて(問て)などの類、また語中或は語尾にありて、右の表に見えざる「う」音の詞(字音を除くの外)は、皆「ふ」の假名と知るべし。例へばあふ(逢)たがふ(違)などの類なり、また頭に來る「う」音の詞は、皆「う」の假名にして「ふ」音が頭に來りて「う」と發音する詞は、一つもなし、また「う」の假字に書くべきを、世俗誤りて「む」とするものあり、すなはちうめ(梅)をむめと誤り、うま(馬)をむまと誤り、うべ(宜)をむべと誤るが如きなり。

○第四表

る	餌、繪、畫、會	る	穢土	る	つば	笑	る	はし	烏帽子			
る	ひ	醉	る	る	ん	ず	怨	る	ん	じ	也	槐

る	み	笑	る	ぐ	し	發	る	ん	ば	蜻	蛉	る	は	う	惠	方							
る	る	彫	る	く	ば	歷	る	か	う	回	向	る	づ	く	嘔	吐							
る	る	飢、植	あ	ま	え	甘	さ	え	小	筒	ほ	え	吼	吠	見	見							
る	る	末、据、陶	お	ば	え	覺	さ	す	え	榮	螺	も	え	萌	燃	見							
る	る	智、慧	い	え	癒	さ	い	え	條	そ	び	え	絶	し	つ	え	下						
る	る	杖	あ	を	ひ	竹	刀	す	わ	え	鴨	柄	た	え	消	す	え	餒					
る	る	聲	か	も	え	聞	つ	ひ	え	費	ひ	こ	ば	え	輾	た	え	ま	つ				
る	る	故	き	え	甲	な	が	え	鮒	い	り	え	入	江	松	明	藥	鶻	下				
る	る	梢	き	こ	え	巴	く	え	び	こ	案	山	子	に	え	超	肥	越	ぬ	え			
る	る	機	き	の	え	才	は	え	絶	映	生	た	え	ま	絶	間	萌	黄	入	江			
る	る	巴	く	え	び	才	は	え	絶	映	生	た	え	ま	絶	間	萌	黄	入	江	松	明	
る	る	礎	こ	え	超	肥	越	ぬ	え	絶	映	生	た	え	ま	絶	間	萌	黄	入	江	松	明
る	る	江、約、枝	ざ	え	才	は	え	絶	映	生	た	え	ま	絶	間	萌	黄	入	江	松	明	藥	鶻
る	る	肖	さ	え	才	は	え	絶	映	生	た	え	ま	絶	間	萌	黄	入	江	松	明	藥	鶻

わえか 柔弱さかえ 榮ふそ 笛、吭、殖

右の表の「ゑ」の部に見えざる詞にして頭に「ゑ」音を持ちたるものは、皆「え」の假字と知るべし、また「ゑ」の部および「え」の部に見えざるの詞にして、語中または語尾に「ゑ」音を持ちたるものは、皆「へ」の假字と知るべし、例へばまへ(前)たへ(堪)なへ(苗)などの類なし、たへし「へ」音が頭に來りて「ゑ」と發音するものは、一つもあることなし。

○第五表 を お ほ ふ

を	小、男、緒、雄、をぐ	招をさ	梭、長をしき	折敷
を	岑、牡、尾、夫、をぐな	童男をさむ	收、治、納をししかは	韋
を	麻、脉、をぐな	桶をさなご	幼兒をす	食
をか	岡をけ	求をさし	飯をそ	獺、謔言
をか	可笑をけら	求をさし	鴛鴦をたけび	雄結
をか	侵、犯をこ	嗚呼、愚戯をし	訓、教をち	遠方
をか	拜をこたる	怠、癪をしへ		

を	老翁、叔父、萩をこる	驕、奢をしむ	愛、惜をちかへり	顧面
を	伯父、をの、く	戰慄かつをむし	蟻、蟻みをつくし	落標
を	ちなし	懦弱をば	伯母、叔母をばい	紅梅やをら
を	つ	臍をはる	終、畢、了さるをかせ	松蘿いをめ
を	つ	現をひ	甥しをに	紫苑あをひえ
を	と	男をみなへし	女郎しをり	菜わさをき
を	と	夫をめぐ	呻、叫しをる	萎、呬噴めをこ
を	と	乙女、少女をり	折、檻、時節たをる	手折あを
を	と	女をる	居、疊たをやか	窈窕うを
を	と	をこつひ	一昨日をるち	美女いさを
を	と	おとし	一昨年を、し	勇壯をむ
を	と	媒鳥をとつる	誘ついらをり	九折さつを
を	と	踊をしね	晩稻ひをむし	誘たけを武雄、猛夫
を	の	斧かをる	香、馨、薫ます	申とを

あじか かたじけ なし くじく くじる さ七き假辰、棧敷 しりみ しりむ たじろく つじむ なじる なまじひ にじ にじる	不 あじろ 簀 あまじし 辱、忝 はじがみ 拆 はじく 扶 はじめ 蜺 ひじり 縮 ほじし 辟 易まじなひ 癒 まじり 詰 まじろく 慾 まじる 寛、虹 みじかし 蹂 むじな	網代 いちじるし 癒肉 かじく 薑 めはじき 彈 あるじ 初、始 やじり 鹿尾菜 いみじ 聖 うじ 脯 うなじ 禁厭 おなじ 毗 きじ 暄 くじ 交、雜 さじ 短 しじ 貉 つじ	著 かじる 憔悴 くじか 荒蔚 すさまじ 主人、響 つゝじ 鏃 とじ 甚 つむじ 蛆 はじ 頂 ひつじ 同 ふじ 雉子 むらじ 岡、籤 もじ 匙 ちじつ 繁 かじか 辻	呪 咀 荒涼 躑躅 刀自、女主 麴、廻毛 臚 羊 富士 連 文字 遅日 猷、河鹿
--	--	--	--	--

とびを 鰯、飛魚 ひを	氷魚 ますらを	丈夫 たを、	撓々
ばせを 芭蕉 みさを	操 みを	水脈	
はやりを 壯士 みやびを	風流 士を、	唯々	

右の表の中「を」の部に見えざる詞にして頭に「お」音を持ちたるものは皆「お」の假字と知るべし、例へばおき(沖)おもひ(思)などの類なり、また「お」音が語中或は語尾に来る詞は、一つも有ることなし、また語中或は語尾に来る「を」「お」音の詞にして右の表中に見えざるものは、すべて「は」の假字と知るべし、例へばかは(顔)しは(鹽)にはふ(匂ふ)などの類なり、しかし「は」音が頭に來りて「お」と發音する詞は、一つも有ることなし、また「お」音に讀みて「ふ」の文字を書く詞あり、すなはちあふひ(葵)あふぐ(仰)たふる(斃)などの類なり。

○第六表 じ ぢ

右の表の中に見えざる「ヒ」音の詞は、頭、語中、語尾に抱はらず、すべて「ぢ」の假字を知るべし、例へばぢく(竺)ぢき(直)ひぢ(臂)ふぢ(藤)なんぢ(汝)もぢる(撰)などの類をいふ。

○第七表 ず づ

ず	不すいろ	漫ねすみ	鼠はず	筈、珥
ずさ	従者すもむし	鈴蟲うず	警華はねず	唐棟花
ずいさ	鱸すゝ	數珠かず	數みゝず	蚯蚓
ずいめ	雀うすいまる	群集さず	疵、傷、創もず	鷄
ずいし	涼たゝすむ	イくず	葛	
ずいり	硯なすらふ	準すい	鈴、錫	

右の表の中に見えざる「づ」音の假字は、頭、語中、語尾に抱はらず、すべて「づ」の假字を知るべし、例へばづ(圖)づ(徒)みづ(水)いづ(出)もづる(讓)しづむ(沈)などの類なり。

○第二節 名 詞

すべて音聲によりて意味をあらはすものを詞といふ、分ちて八種とす、すなはち名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、後詞、接續詞、感詞、是れなり、

名詞とは、物事の名を示す詞なり、例へば、

- 人 馬 鳥 梅 燕 花 日 月 山 水
- 雨 雪 漁船 鐵道 政事 戦争 商業 農事 文學 勤勉
- 清麿 重盛 正成 秀吉 隆盛の類なり。

また名詞或は、代名詞の下に置きて、其意味を助くる詞あり、之を助名詞といふ、例へば、

- 「子供ら」の……ら 「法師ばら」の……ばら 「人たち」の……たち
- の類をいふなり。

○第三節 代 名 詞

代名詞とば、名詞の代りの役目を勤むる勤なり、これを三種に分つ、すなはち其人類のみに用ひらるゝを人代名詞といひ、物事を指し示すためのを指示代名詞といひ、疑問の意を示すものを疑問代名詞といふ

○第四節 動 詞

動詞とは、物事の働さをあらはす詞なり、自動詞、他動詞及び添動詞、助動詞の四種あり。

一)自動詞 とは、他の物事に働さを及ばさぬ詞にして、「を」の詞をもちたる名詞を前に要せぬものをいふ、すなはち、

- 有る……(人有る)(花有る) 起る……(風起る)(火起る)
- 散る……(花散る)(霰散る) 眠る……(人眠る)(蝶眠る)
- 降る……(雨降る)(雪降る) 咲く……(花咲く)(櫻咲く)
- 鳴く……(鳥鳴く)(鶴鳴く) 老も……(人老も)(年老も)
- 枯る……(木枯る)(葉枯る) 消也……(雪消也)(火消也)

燃も……(家燃も)(火燃も) 満つ……(水満つ)(志満つ)
 落つ……(葉落つ)(實落つ) 澄む……(天澄む)(氣澄む)
 閉づ……(氣閉づ)(家閉づ) 瘦す……(身瘦す)(水瘦す)
 綻ぶ……(衣綻ぶ)(花綻ぶ) の類をいふなり

また自動詞の内に、おのづから然せらるゝ意味をあらはす詞、すなはち「しせん」に「おのづから」などの意味を言外に置きて見るべき詞あり、之を自然言といふ、例へば、

自 動 詞

- 寐る……(人寐る)
- 晴る……(天晴る)
- 消也……(火消也)
- 酔ふ……(酒に酔ふ)
- 勝つ……(戦勝つ)

自 然 言

- 寐らる(いつしか「シゼンニ」寐らる)
- 晴れる(いつしか「シゼンニ」晴れる)
- 消ゆる(終に「オノツカラ」消ゆる)
- 酔はる(覺えず「シゼンニ」酔はる)
- 勝たる(戦「オノツカラ」勝たる)

の類をいふ。

(二)他動詞 とは、自動詞に反して、他の物事に働きを及ぼす詞にて、「を」の詞を持ちたる名詞を前に要するものをいふ、例へば、

- 有らしむ……(風を有らしむ)
- 散らす……(花を散らす)
- 降らす……(雨を降らす)
- 鳴かす……(鳥を鳴かす)
- 枯らす……(葉を枯らす)
- 燃やす……(火を燃やす)
- 落す……(實を落す)
- 閉ざす……(家を閉ざす)
- 綻ばす……(花を綻ばす)
- 打つ……(脊を打つ)
- 書く……(文字を書く)
- 飲む……(酒を飲む)
- 起らしむ……(火を起らしむ)
- 眠らす……(兒を眠らす)
- 咲かす……(梅を咲かす)
- 老いさす……(し人を老いさす)
- 消す……(雪を消す)
- 満たす……(水を満たす)
- 澄ます……(氣を澄ます)
- 痩せさす……(身を痩せさす)
- 見る……(花を見る)
- 焚く……(火を焚く)
- 棄つ……(塵を棄つ)
- 埋む……(屍を埋む)

また他動を逆に用ひて、他より働きを受くるやうにする言ひ方あり、之を被然言といふ、そは「に」の詞を前に要するを常とす、例へば、

- | | |
|---|---|
| <p>他 動 詞</p> <ul style="list-style-type: none"> 打つ……(犬を打つ) 取る……(金を取る) 消す……(火を消す) 汚す……(衣を汚す) 噛む……(蟻を噛む) 焼く……(家を焼く) | <p>被 然 言</p> <ul style="list-style-type: none"> 打たる……(人に打たる) 取らる……(賊に取らる) 消さる……(風に消さる) 汚さる……(泥に汚さる) 噛まる……(猫に噛まる) 焼かる……(火に焼かる) |
|---|---|

- 貸す……(金を貸す)
- 吸ふ……(汁を吸ふ)
- 統ぶ……(兵を統ぶ)
- の類をいふなり。
- 刺す……(針を刺す)
- 買ふ……(米を買ふ)
- 植う……(竹を植う)

の類をいふなり。

(三)添動詞 とは、動詞の前に添へ用ひて力を附くる詞なり、例へば

打ち……(打ち見遣る)(打ち聞く)(打ち笑ふ)(打ち仰ぐ)

搔き……(搔き消す)(搔き見る)(搔きくらす)

差し……(差し遣はす)(差し出る)(差し向ふ)(差し挿す)

の類をいふなり。

(四)助動詞 とは、動詞の下に置きて、動詞の意味を補助するものを

いふ、すなはち左に示す圈点のある詞の類なり、また片假字にて記せるは、其意味を俗語に譯したる詞なり。

有りき(タ) 有りにき(タ) 見てき(タ) 爲したり(タ) 行き

ぬ(タ) 知りつ(タ) 有りけり(タ)(タナア) 見えり(タ)見え

にけり(タ)(タナア)

以上は、過去の意を示すものなり。

せん(ウ)(デアラウ) なさなん(ウ)(デアラウ) 有らん(デ

以上は、推量の意に用ふる詞なり。

見せ(ヨ) ね(ヨ) べし(ヨ) 折らばや(タイモノヤ) なん

(テホシイ)(テモラヒタイ) 聞たし(タイ) こそ(テホシイ)

(テモラヒタイ)

以上は、願と命令の意を示す詞なり。

是れなり(チャ)(デアル)(コトヨ)

右は、意を確ならしめ又は餘情を添ふるために用ひる詞なり

晴る(レル) 見らる(レル)

以上は、自然言、被然言の形を示す詞なり。

待たす(セル) 満たさす(サセル) 居らしむ(セル)

以上は、他を使役するの意を示す。

見させ(「セ」に同じ) 居らる(ラレル) 迎へ給ふ

す(「給フ」に同じ) 來ます(「給フ」に同じ) 候ふ

以上は、敬ひの意を示すものにして、他に對していふ詞なり。

送り奉る 迎へまゐらす(「奉ル」に同じ) 申す 聞ゆ(「申ス」

に同じ) 候ふ 記し侍る(「候フ」に同じ)

以上は、敬ひの意を示すものにして、自のいふ詞なり。

ざる(「マイ」) まじ(「マイ」) ず かな ませそ(「ナ」に同じ)

こそすな(「ナ」に同じ)

以上は、打消を示す詞なり。

○第五節 形容詞

形容詞とは、名詞、代名詞の意味を、形容確定する詞なり、其特に尊

敬を示すものを尊敬形容詞といひ、疑問を示すものを疑問形容詞といひ、數をあらはすものを數形容詞といひ、之等に對して普通のものを常形容詞といふ、例へば、

おん。 お。 おはん。 おは。 み。 おほみ。 きよ。 ぶ。

以上示せる如き詞を尊敬敬容詞といふ。

一つの。 十の。 百の。

以上示せる如きものを數形容詞といふ。

いづれの。 如何なる。 づこの。

以上示せる如きものを疑問形容詞といふ。

赤き。 寒き。 嬉しき。 樂しき。 尊き。 卑しき。 清き。

淡き。 大なる。 巍峨たる。 幽かなる。 細小の。 美麗の。

以上示せる如きものを常形容詞といふ。

○第六節 副 詞

副詞とは、動詞、形容詞又は他の副詞の意味を、形容確定する詞にして、其特に前句との接續を示すものを接續副詞といひ、疑問を示すものを疑問副詞といひ、之等に對して普通のものゝ常副詞といふ、例へば、

そもく。よりに。さはいへ。隨て。故。

以上示せる如きものを接續副詞といふ。

いかに。など。など。

以上示せる如きものを疑問副詞といふ。

靜かに。いと。久しく。遙かに。清く。美しく。幸に。

以上示せる如きものを常副詞といふ。

○第七節 後 詞

後詞とは、詞と詞との間の關係を示す詞にして、其特に意味の強弱を示すものを力後詞といひ、疑問を示すものを疑問後詞といひ、之等に

對して普通のものゝ常後詞といふ。

(一)力後詞とは、左に示す如きものをいふ。

は。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

雨は降り風は吹く。日は暮れ路は遠し。

も。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

雨も降り風も吹く。日も暮れ路も遠し。

なん。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

雨なん降り風なん吹く。日なん暮れ路なん遠し。

なも。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

古の詞にしてなんに同じ。

こそ。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

雨こそ降れ。路こそ遠けれ。

そ。各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

風ぞ吹く。日ぞ暮る。

し。 し。 だ。 じ。 じ。 や。

各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、常に「は」の詞の上に用ふる事多し、たとへば、
雨し降らねば。 路しよければ。

「し」と用ひ方同じ、たとへば、
見しも知らねば。 誰しも居らねば。

各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、
夜もすがら見てをわかさん秋の月。 今も昔も知らずとをいはん。

動詞と動詞との間に置くもの、たとへば、

知ると知る。 有りと有る。

動詞と動詞との間に置くもの、たとへば、

思ひに思ふ。 急ぎに急ぐ。

動詞と名詞(又は代名詞)との間に置き、或は名詞と名詞との間に置きて、地名または枕詞などを結び付るものあり、

(二) 疑問後詞とは、左に示せる如きものをいふ。
か。 や。

たとへば、
鳴くや霜夜の。 飛ぶや螢。 散るや花。
菅原や伏見の里。 紀伊國や那智の御山。

各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、
有るか無き。 誰れか知る。

各種の詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たゞし疑問代名詞、疑問形容詞、疑問副詞の下には置くを得ざるものなり、たとへば、

梅や咲く。 鳥や嘯く。 あるや戀し。 なみや悲し。

(三) 常後詞とは、左に示せる如きものをいふ。

名詞(又は代名詞)と名詞(又は代名詞)との間に置くもの、
たとへば、

秋の月。 琵琶の湖。 人の心。 玉の簪。

動詞(又は代名詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、俗語に譯すれば、片假名にて記せる意味となるなり、たとへば、

日(が)曇る。 花(が)散る。 人(が)笑ふ。

動詞(又は形容詞)と動詞(又は代名詞)との間に置くもの、たとへば、

人を送くるの文。 月を眺むるの圖。

形容詞と動詞(又は代名詞)との間に置くもの、たゞし形容詞は、語尾の「き」音を略して用ふるなり。

美はしの姿や。 怨めしの心や。 面白の有様や。

名詞(又は代名詞)と名詞(又は代名詞)との間に置くもの、たとへば、

松が枝。 梅が香。 葎が宿。 君が代。 妹が許。

名詞(又は代名詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、

に。 つ。

を。

鳥が鳴く。 人が住む。 花が散る。 月が出る。

動詞(又は形容詞)と形容詞との間に置くもの、たとへば、行くが遅き。 白さがうへに。 よさがよき。

名詞と名詞との間に置くもの、「の」の意味に同じ、たとへば 天の神。 底の岩根。 國の神。

名詞(又は代名詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、神に祈る。 人に教ふ。 花に戯る。 君に仕ふ。

山に上る。 水に泛ぶ。 動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、

たとへば、 試しに用ふ。 よきに改たむ。 歎きに沈む。 止むるにやまず。

名詞(又は代名詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、

笛を吹く。 花を折る。 道を行く。 月を見る。 水を

を汲む。

動詞(又は形容詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、

走るを追ふて。 白きを見て。 難きを破る。

名詞(代名詞又は形容詞)と動詞との間に置くもの、たゞし

「方に」方角に向ひ」などの意味に用ふるなり、たとへば、

東へ上る。 西へ行く。 奥へ下る。

と。 名詞(代名詞又は形容詞)と動詞との間に置くもの、たとへ

ば、

我と語らん人と語るな。 雲となり雨となる。 昨日と

過ぎ今日と過ぎて。

とへ。 名詞(代名詞又は動詞)と動詞との間に置くもの、「まで」「其

上に」などの意味に用ふるなり、たとへば、

文さへ遣りしに。 子さへ設けて。 供さへ連れて。

すら。 名詞(代名詞又は動詞)との動詞との間に置くもの、「でも」

だに

「でさへ」の意味に用ふるなり、たとへば、

言さはぬ木すら妹と兄ありといふ。 鳥けものすら子を

思はぬはなきに。 暫しの別れすら悲しきに。

名詞(代名詞又は動詞)と動詞との間に置くもの、「さへ」で

も「なりとも」「だけでも」などの意味に用ふるなり、たと

へば、

雪とのみ降るだにあるを。 かれだに無ければ。 雪だ

に降らねば。 空だに晴るれば。

から。 名詞(代名詞又は動詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、

我身からうき世の中を歎きつゝ。 折るからに我名はた

ちぬ。

はと。 名詞(代名詞又は動詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くも

の、たとへば、

口はとにはたらきも無く。 花半ばはと咲く。 聞きし

よ。り。ほ。ど。には美はしからず。
名詞(代名詞又は動詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、

波より出で。山より高し。雪より白し。夢より暮なし。

ま。で。名詞(代名詞又は動詞)と動詞との間に置くもの、たとへば、
袖まで匂ふ。里まで出で。

の。み。名詞(代名詞又は動詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

山のみ見ゆる。家のみ残る。降りのみまさる。

ば。か。り。名詞(代名詞又は動詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、「ほど」の「み」などの意味に用ふるなり、たとへば、
人ばかり多くて。心ばかりはやりて。今來んといひしばかりを命にて。

て。動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、

で。

ば。

ど。

た。と。へ。ば。

行きて見ん。走りて歸る。笑ふて示す。

動詞と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、「ずして」の意味に用ふるなり、たとへば、

訪はで過ぎけり。待たで行く。動かで静かなり。

動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たゞし推量の時は「なら」「タラ」の意味、また原因を示す時は「から」との意味、また同時に起る働を示す時には「と」「時に」の意味となるなり、たとへば、

いざ櫻折らば散らなん。勝てば勇む。急げば躓く。盈れば虧る。覺れば悟る。

動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

尋ぬれど知れず。

聞けど聞えず。

見れど見えず。

ども 「と」を用ひ方同じ。

ども 尋ぬれども知れず。聞けども聞えず。見れども見えず。動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、たとへば、

つゝ 逢ふども知らず。寒くども堪へて。

つゝ 動詞と動詞との間に置くもの、「ながら」または同じ働きをしばく繰り返す意味に用ひるなり、たとへば、
知りつゝいふ。聞きつゝ進む。

ながら 動詞と動詞との間に置くもの、たとへば、
知りながらいふ。聞きながら進む。

は「なれども」の意味に用ふ、たとへば、
枝ながら折る。 憚りながら御安堵。

とちて
ふふふ

ともに名詞(代名詞又は動詞)と名詞との間に置くもの、「と
いふ」の意味なり、たとへば、

哀れてふことだになくば。 燃るちふ山。 戀とふもの
はかつて止まざりけり。

み 動詞と動詞(又は形容詞)の間に二つ重ね用ひて「或は」などの意味を含むもの、俗言の「たり」といふ意なり、たとへば、
梓弓ひきみゆるべみ思ひみて。 降りみ降らずみ定めなし。

つ 「み」と同じ用ひ方なり、たとへば、
よれつもつれつ糸柳の。 起きて見つ寐て見つ蚊帳のひろさ哉。

ぬ 「み」と同じ用ひ方なり、たとへば、

もものもる。 浮きぬ沈みぬ流れ行く。

ものもる。 動詞(又は形容詞)と動詞(又は形容詞)との間に置くもの、
「ものながら」ものなるに「な」の意味なり、たとへば、
叶はぬものもる敵に後見られんもうたてく。いざやこの世に長からざらんものもるなかくならん絆なとのあらんこと。

ものから 用ゐる方も意味も「ものもる」に同じ、又「なれども」の意

味なるもあり、たとへば、

人の住むものから妖怪なぞや云々。 思ふものから言ひも出でられず。 鹽會に浮ぶ泡の消えぬものからよる方もなし。

○第八節 接續詞

接續詞とは、別々の詞又は章句を一つに結び付る詞なり、たとへば、

と……天と地。 男と女。 草と木。 陸路と海路と。 咲くと散ると。

や……日や月や。 雪や氷。 犬や猫。 舟や車や。 夢や現。

又は鳥又は獸。 空晴れ又は曇る。

あるひは……歌を詠み或は詩を作る。 馬に乗り或は駕籠に乗る。

あるは……「あるひは」に同じ。

さては……遠き國々さては近き村里。

および……家および藏。 衣類および調度。

ならびに……土地ならびに人民。

○第九節 感 詞

感詞とは、感動して出づる聲又は自然に出づる聲をあらはす詞なり、これに二種あり一つを前感詞といひ、一つを后感詞といふ。

(一)前感詞とは、章句の前に置く詞なり、すなはち左に示すが如し、

あな……あなうたて。あなおもしろ。あなかしこ。あな
 美し。
 あら……あら笑止や。あらすいし。
 あ……あ、悔しい。あ、かなしいかな。
 あはれ……あはれ世にありし時は。あはれ昔ならましかば。
 あつばれ……あつばれ御器量や。あつばれ功名手柄して。
 や……や此處にありけるよ。や、いなしたり。
 やあ……やあ珍らし。やあ不思議の事よ。
 やよ……やよ君。やよ我妻。
 あはや……あはや殺されんとす。あはや倒れなんとして。
 のう……のう悲しやと。のう是れは夢か現か。のうわが君。
 いや……いや中々に。いやの人々。いや口は舌にもなし。
 すは……すはござんなれ。すは戦場といふ時には。
 (二)後感詞とは、章句の後に置く詞なり、すなはち左に示すが如し。

や……これぞ不思議や。おぼろげの月影や。
 な……見せばやな。老いにけらしな。
 も……心してしも。忘れかねつも。
 かし……物ぞかし。聞けよかし。心せよかし。
 はや……かへり見しはや。吾つまはや。
 か……うつ蟬の世にも似たるか。宿世の縁か。
 かな……月を見るかな。老いにけるかな。哀れなるかな。
 かも……紐とさあぐる君のなきかも。三笠の山に出し月かも。
 ぞ……いかにせしぞ。心なきわざよ。
 よ……おかしかりしよ。うつし心よ。
 ね……はや船出してこの浦を去りね。
 は……いかいはせんは。
 を……雪とのみ降るだにあるを。昨日今日を思はざりしを。

以上示したる感詞を感詞同士互に重ねて用ひ、又は他の種類の詞と連

ね用ふる事常に多し。

○第十節 活用

活用とは、語尾の變化すべき仕方、すなはち働きをいふ、これに三種あり、其一は動詞の働にして、是を用言活用といひ、其二は形容詞、副詞又は助動詞の働にして、是を形状言活用といひ、其三は用言、形状言の變化の外にて助動詞のみに用ふるもの、是を特状活用といふなり。

一 用言活用

用言活用とは、四段、上二段、下二段、上一段、下一段の五種の活用と、この五種の活用より出で、不規則なるもの、すなはち變格とをいふ、動詞に用ひらるゝものはなり。

イ 四段活用

五十音圖にて「か、き、く、け」「さ、し、す、せ」等の四段に變化するものを四段活用といふ、すなはち。

の類これなり。

其第一變化

書か 寫さ 待た 思は 編ま 祈ら

書き 寫し 待ち 思ひ 編み 祈り

書く 寫す 待つ 思ふ 編む 祈る

書け 寫せ 待て 思へ 編め 祈れ

其下に受くる詞

ん まし ばや なん
る す しま ず
で じ ざる ば

其第二變化

書き 寫し 待ち 思ひ 編み 祈り

其下に受くる詞

き き つ たし たり
けり けん つ、 な。そ
ながら て

其第三變化

書く 寫す 待つ 思ふ 編む 祈る

其下に受くる詞

らん らし べし めり
まじ と とも な
なかれ や も かし
に を より から
まで なり か かな
は

其第四變化

書け 寫せ 待て 思へ 編め 祈れ

其下に受くる詞

ば せ とも や
よ かし

(二) 上二段活用

五十音圖にて「い」列「う」列の二音若くは之に「る」「れ」の音添はりて變化するものを上二段活用といふ、すなはち。

起き 掘じ 落ち 戀ひ

起き 掘す 落ち 戀ふ

起くる 掘する 落ちる 戀ふる

起くれ 掘ずれ 落ちれ 戀ふれ

其第二變化

起く 掘す 落つ 戀ふ 試む 報也 下る 率う

起き 掘じ 落ち 戀ひ

起さる 掘じる 落ちる 戀ひる

起され 掘じれ 落ちれ 戀ひれ

この變化以下を俗言にては、上一段として用ふ、すなはち左の如し。

其下に受くる詞

らん らし べし めり
 まじ と とも なり
 や も かし なり

の類これなり。

其第一變化

起き 掘じ 落ち 戀ひ 試み 報い 下り 率ぬ

試む 報也 下る 率う

其下に受くる詞

ん まし ばや なん
 らる さす しむ す
 で ぬ じ ざる たり
 き けん つ たし な。そ
 けり つ、 ながら よ
 て

試むる 報ゆる 試むれ 報ゆれ 下るる 下るれ 率うる 率ふれ

五十音圖にて「え」列「う」列の二音若くは之に「る」「れ」の音添はりて變化するものを下二段活用といふ、すなはち。

得(え) 得(う) 得る 得れ
 助け 助く 助くる 助くれ

其第四變化
 起くれ 掘ずれ 落つれ 戀ふれ 試むれ 報めれ 下るれ 率うれ

其下に受くる詞
 ば せ とも

其第三變化
 起くる 掘ずる 落つる 戀ふる 試むる 報める 下るゝ 率うる

試み 試みる 試みれ
 報い 報いる 報いれ
 下り 下りる 下りれ
 率ゐ 率ゐる 率ゐれ

其下に受くる詞
 に を より から
 まで なり か かな
 は なかれ

この變化以下俗言にては下一段として用ふ、すなはち左の如し。

絶も 暮る 植う

得(え)	得る	得れ
助れ	助ける	助けれ
瘦せ	瘦せる	瘦せれ
當て	當てる	當てれ
重ね	重ねる	重ねれ
辨へ	辨つる	辨へれ
嘗め	嘗める	嘗めれ
絶え	絶える	絶えれ
暮れ	暮れる	暮れし
植ゑ	植ゑる	植ゑれ

其第三變化

得(う)る
助くる
瘦する
當つる
重ねる
辨ふる
嘗むる
絶ゆる
暮る、
植うる

其第四變化

得(う)れ
助くれ

其下に受くる詞

に	を	より	から
まで	なり	か	かな
に	なかれ		

其下に受くる詞

ば ぞ とも

の類これなり。

其第一變化

鑄(い)	着(き)	烹(に)	干(ひ)	見(み)	居(ゐ)
鑄(る)	着(る)	烹(る)	干(る)	着(る)	鑄(る)

其第二變化

鑄(る)	着(る)	烹(る)	干(る)	見(る)	居(る)
鑄(れ)	着(れ)	烹(れ)	干(れ)	見(れ)	居(れ)

其下に受くる詞

ん	らる	で	よ	たり	な。そ
まし	さす	じ	き	けり	て
ばや	しむ	ざる	ぬ	けん	つゝ
なん	ず	ば	つ	たし	ながら

瘵すれ	當つれ	重ぬれ	辨ふれ	嘗むれ	絶ゆれ	暮るれ	植うれ
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

(ロ) 上一段活用

五十音圖にて「い」列の一音若くは之に「る」「れ」の音添はりて變化するものを、上一段活用といふ、すなはち。

鑄(る)	着(る)	烹(る)	干(る)	見(る)	居(る)
鑄(れ)	着(れ)	烹(れ)	干(れ)	見(れ)	居(れ)

居る

は

其第三變化

其下に受くる詞

鑄れ

ば

ど

ども

着れ

煮れ

干れ

見れ

居れ

(ハ) 下一段活用

五十音圖にて「え」列の一音若くは之に「る」「れ」の音添はりて變化するものを下一段活用といふ。すなはち。

蹴^け

蹴る

蹴れ

綜

綜る

綜れ

の類これなり。

其第一變化

其下に受くる詞

蹴(け)

ん

まし

はや

なん

らる

さす

しむ

す

で

じ

ざる

たり

き

ぬ

つ

たり

けり

けん

たし

な。そ

て

つゝ

ながら

よ

其第二變化

其下に受くる詞

蹴る

らん

らし

べり

めり

まじ

ど

ども

な

なかれ

や

も

かし

た

を

より

から

まで

なり

か

かな

綜る

は

なり

か

かな

其第三變化

其下に受くる詞

蹴れ
綜れ

ば

と

とも

(カ)行變格

(カ)行變格とは、「こ。き。く。くる。くれ」と變化する詞にして、四段活用の正則に従はざるものをいふ、「來」の詞に限れり。(五階活用圖を見るべし)

(ト)行變格

(ト)行變格とは、「せ。し。す。すれ」と變化する詞にして、四段活用の正則に従はざるものをいふ、「爲」の詞に限れり。(五階活用圖を見るべし)

(ナ)行變格

(ナ)行變格とは、「な。に。ぬ。ぬる。ぬれ」と變化する詞にして、四段活用の正則に従はざるものをいふ、「往ぬ」「死ぬ」などこれに屬す。(五階

活用圖を見るべし

(リ)行變格

(リ)行變格とは、「ら。り。る。れ」と變化する詞にして、四段活用の正則に従はざるものをいふ、「足り」「鳧有り」「侍り」などこれに屬す。(五階活用圖を見るべし)

(二) 形狀言活用

形狀言活用は二種ありて、一つを(ク)活といひ、一つを(シク)活といふ、形狀言副詞および助動詞に用ひらるゝもの是なり。

(イ) 活 用

「く。し。き。けれ」と變化するものを(ク)活用といふ、すなはち左に示すが如し。

善く

善し

善き

善けれ

白く

白し

白き

白けれ

の類これなり。

其第一變化

白く

其下に受くる詞

は

て

して

とも

其第二變化

白き

其下に受くる詞

と

な

や

も

かし

其第三變化

白き

其下に受くる詞

に

を

より

から

まで

なり

か

かな

は

其第四變化

白けれ

其下に受くる詞

ば

と

とも

「しく。し。き。しけれ」を變化するものを(しく)活用といふ。すなはち左に示すが如し。

優しく

優し

優しき

優しけれ

の類これなり。

正しく

正し

正しき

正しけれ

其第一變化

優しく

其下に受くる詞

は

て

して

とも

其第二變化

優し

其下に受くる詞

と

な

や

も

かし

其第三變化

優しき

其下に受くる詞

に

を

より

から

まで

なり

か

かな

は

其第四變化

優しけれ

其下に受くる詞

ば

と

とも

(ハ) 形状言變格

形状言變格とは、「せ。く。し。で。しか」と變化するものを「せ。く。し。で。しか」の助動詞これなり。

(三) 特 状 活 用

特状活用とは、用言、形状言の變化の外にて助動詞にのみ用ひらるゝものを集めいふ稱へなり、すなはち左の如し。

過去助動詞(き)の字の活用なり、すなはち「せ。き。し。か」と變化するなり、(五階活用圖を見るべし)

推量助動詞(ん)の字の活用なり、すなはち「ん。め」「らん。め」「けん。め」と變化するなり、(五階活用圖を見るべし)

打消助動詞(ず)の字の活用なり、すなはち「ず。ぬ。ね」と變化するもの、(五階活用圖を見るべし)

○ 第十一節 五階活用表

以上に示したる諸種の活用を一定の用方により五階に分つ、而して其第一階は、「ん」に續く變化にして、これを將然言と稱へ、其第二階は、他の動詞に續く詞にして、これを連用言と稱へ、其第三階は、意味の切る、詞にして、これを終止言と稱へ、其第四階は、名詞に續く詞にして、これを連體言と稱へ、其第五階は、「と」に續く詞にして、これを既然言と稱ふ、今其活用の諸記復習に使せしめんために、左に其一覽表を示す。

用 言					
用 活 段 四					
祈	編	思	待	寫	書
ら	ま	は	た	さ	か
ら な が な	ま ま ま	は は は	た た た	さ さ さ	か か か
り	み	ひ	ち	し	み
ら な が な	み み み	ひ ひ ひ	ち ち ち	し し し	み み み
る	む	ふ	つ	す	く
ら な が な	む む む	ふ ふ ふ	つ つ つ	す す す	く く く
る	む	ふ	つ	す	く
ら な が な	む む む	ふ ふ ふ	つ つ つ	す す す	く く く
れ	め	へ	て	せ	け
ら な が な	め め め	へ へ へ	て て て	せ せ せ	け け け

言

段一下	用活段一上						用活				
蹴	居	見	干	烹	着	鑄	植	暮	絶	嘗	辨
け	ゐ	み	ひ	に	き	い	ゑ	れ	え	め	へ
しむ らる す	よ	ざる	で	しむ	らる	ばる	よ	ざる	で	しむ	らる
す	ば	し	す	ます	なん	まし	(推量)				
け	ゐ	み	ひ	に	き	い	う	る	も	む	ふ
けり う けん	らな	て	たし	けり	つ	き	らな	て			たし
なり	なん	つ	そ	けん	なり	ぬ	なん	つ			そ
ける	ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	う	る	も	む	ふ
まじ べし と	かし	や	ども	まじ	べし	らん	かし	(感詞)	(疑問)	(禁止)	ども
めり	なり	も	(感詞)	と	めり	らし	なり				
ける	ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	う	る	も	む	ふ
まじ より なり	は	か	まじ	より	に	を	は	(感詞)	(疑問)		
から	れな	かな	なり	から	を		れな				
けれ	ゐれ	みれ	ひれ	はれ	きれ	いれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ
は	は	は	は	は	は		は				

用

段二下	用活段二上											
重	當	瘦	助	得	率	下	報	試	戀	落	掘	起
ね	て	せ	け	え	ゐ	り	い	み	ひ	ち	じ	き
					よ	ざる	で	しむ	らる	ばる	なん	まし
					ば	し	す	ます	なん	まし		
ぬ	つ	す	く	う	ゐ	り	い	み	ひ	ち	じ	き
けり			つ	き	らな	て	たし	けり	つ	き		
けん			なり	ぬ	なん	つ	そ	けん	なり	ぬ		
ぬ	つ	す	く	う	う	る	も	む	ふ	つ	ず	く
まじ			べし	らん	かし	や	ども	まじ	べし	らん		
と			めり	らし	なり	も	な	と	めり	らし		
ぬ	つ	す	く	う	ゐ	り	い	み	ひ	ち	じ	き
					は	か	まじ	より	に	を		
					れな	かな	なり	から	を			
ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	られ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	すれ	くれ
は					は					は		

言 状 形				言				
格 變	用 活 久 之		用 活 久		格 變 行 良			
	正	優	白	善	侍	有	鳥	足
ま	く	く	く	く	ら	ら	ら	ら
は	は	は	は	は (推量)	ら	ら	ら	ら
き	く	く	く	く	り	り	り	り
	と	て	と	て	ら	ら	ら	ら
ま	し	し	し	し	り	り	り	り
か	か	や	か	や	か	な	な	な
ま	し	し	し	し	る	る	る	る
	は	か	は	か	か	か	か	か
か	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
ま	は	は	は	は	は	は	は	は

用							
格 變 行 奈		格 變 行 佐		格 變 行 加		用 活	
死	往	爲	來	綜			
な	な	せ	こ	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			
に	に	し	き	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			
ぬ	ぬ	す	く	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			
ぬ	ぬ	す	く	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			
ぬ	ぬ	す	く	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			
ぬ	ぬ	す	く	へ			
ら	ら	ら	ら	ら			

以上に示したる外「給ふ」「奉る」「まゐらす」「侍り」「候ふ」「申す」「聞ゆ」などの類は、用言正格若しくは（ら）行變格にそれ／＼活用する詞なりまた（なん「願」）（よ「命令」）（な「禁止」）（らし「推量」）の類は、すべて變化なき詞を知るべし。

○第十二節 係結

係結は、文章を組織し、歌をよむに必要のものにして、章句中上に置きたる詞の爲め切るゝ處の語尾に變化を及ぼすものをいふ、其上に置きたる詞は係詞にして、其下に立ちて爲めに變化の及ぼさるゝが結詞

言 状 形			
ま	く	たく	べく
は ども は			
ま	く	たく	べく
して て			
ま	ま	たし	べし
かし や ど			
		も	な
ま	ま	たき	べき
は	か	ま	より
	かな	なり	から
か	け	れ	れ
まし	けれ	たけ	べけ
さ ぞ は			

格 變 行	格 變 行		
な	ら	め	け
は	なん	は	す
	で		を
	まし		
に	ら	め	
け		き	
り	け	ぬ	
けん	けん		
ぬ		め	け
かし	な	ど	かし
	や	ど	な
	も	ど	や
	ら		ど
	まし		
ぬ	ら	め	ける
は	か	ま	より
	かな	なり	から
	なり	から	を
	を		
ぬ	れ	め	け
かし	さ	ぞ	は
	まし		は
	ら		は
	ら		は
	ら		は

二		上		段				四	
試	戀	落	起	祈	編	思	待	寫	書
む	ふ	つ	く	る	む	ふ	つ	す	く
むる	ふる	つる	くる	る	む	ふ	つ	す	く
むれ	ふれ	つれ	くれ	れ	め	へ	て	せ	け

(何) (か) (や)

(こそ)

なり。

係詞に二種あり、「ぞ」「なん」の「がの意味の」「や」「か」「何」の七種を第一の係といひ、「こそ」を第二の係といふ。

第一の係詞の中、「何」といふは、すべての疑問詞を代表せるものにて「など」「なぞ」「いかなる」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」「いかに」等、皆之に含めりと知るべし。

今これを一覽表と爲して左に示す。(前に出だせる五階活用表に照し合せ見るべし)

(係詞なき時の結び)

(第一係結)

(第二係結)

(ぞ) (なん) (の) (が)

變

良	奈行		佐行		加行		段下二		段 一 上				
	有	往	爲	來	綜	蹴	居	見	干	烹	着	鑄	
り (助動)	り	ぬ	す	く	る	る	る	る	る	る	る	る	
る	る	ぬる	する	くる	る	る	る	る	る	る	る	る	
れ	れ	ぬれ	すれ	くれ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	

段 二 下										段		
植	暮	絶	嘗	辨	重	當	瘦	助	得	率	下	報
う	る	ぬ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	る	ぬ
うる	る	ぬる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	うる	る	ぬる
うれ	るれ	ぬれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	うれ	るれ	ぬれ

以上に示せる一覽表の係結の實例を掲ぐれば左の如し。

散さじとせめても思ふ玉章はわがつかひにて我どもてゆく
さらぬだに覺るまもなき夢の中を驚かすにも鹿こそは鳴け
いかばかりしげるあやめぞ皆人の宿るもふきつ枕にも結ふ
君が代は天つ空なる星なれやかすもしらぬ心地のみして
都にはまだ移はぬ菊もあれと君をまつまは千とせとぞ思ふ
もれいづる音にてぞしる卯の花の下枝しがらむ玉がはの水
花みても昔に變るこのもとはさこそかへさの物うかりけめ
きくたびに珍らしければほとゝぎすいつも初音の心地こそすれ

花なんうるはしき

花のうるはしき

○二段の係結の例

花こそうるはしけれ

○係詞なき時の結の例

花はうるはし

花もうるはし

格	行			形 状 言			特 状
	たり	けり	めり	し	し	まし	
たり	たり	けり	めり	し	し	まし	き
たる	たる	ける	める	し	し	まし	し
たれ	たれ	けれ	めれ	し	し	まし	し

○一段の係結の例

花ぞうるはしき

花やうるはしき

花がうるはしき

ひとり着て我身にまどふ唐衣しほくところなき濡さるれ
 夕ざれや檜原の嶺をこえゆけばすごくきこゆる山鳩のこゑ
 物思へばかべにそむくる澄火の消かへりてぞ明しかねつる
 梅の花むかしを忍ぶつまもやとまち顔にこそ匂ひましつれ
 あふ人になき戀路ゆく苦しさに休む間とては身をぞ恨むる
 立田河ふきこす風をまちてこそぬれぬ紅葉を袖にうけつれ
 もしきの大宮人の神あそび千代とぞたかく聲はきこゆる
 うれしとぞ思ひぞわかぬ郭公春さくことのならひなければ
 玉ねてもすむことかたさま清水は心淺くぞおもひ知らるゝ
 何となくすまゝはしくぞ思はゆる鹿の音たえぬ秋の山ざと
 さまゝに思ひ亂るゝ心をば君がもとにぞつかねあつむる
 たぐひなき心地こそすれ秋の夜の月すむ夜半の嶺のさを鹿
 天の原朝日山より出ればや月の光りのひるにまがへる
 誠には雲井の花を見んとてや我によそへてそらたづねせし

見に見えぬ風の來たらば告よとて植てし萩ぞちぎり違へぬ
 春雨のふりそめしより青柳の糸の緑りぞいろまさりける
 みつ潮のひるまに來んと頼めしをまちぞ佗ぬる須磨の蜚人
 今朝こそは習はぬ身にもあひて逢ぬ戀とは是を思ひ知りぬれ
 我涙しぐれの雨にたへばや紅葉の色のそでにまがへる
 夜をこめて竹の編戸に立霧の晴ればやがてや明んとすらん
 あひも見で歸れば昆陽の池水となれる涙にうさねをぞする
 なつも猶ゆさげの水の末なれば不二の河こそ冬ぞちすれ
 入日さす山の端さへぞ怨しき暮すば春の歸らましやは
 玉川と音にさゝしは卵の花を露の飾れる名にこそありけれ
 したもえに思ひさえなんけふりだにあとなき雲のはてぞ悲しき
 棚機のおひみしよはの契りとそわかれてのちの形見なりけれ
 山の井の清水むすびて日はくれぬ月と共にや宿をからまし
 君が代を何に譬へんと思へとも果なき物のあらばこそあらめ

久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花のちるらん
慰むる方やなからんはなもちり春も暮れ行く鶯のこゑ
變りゆく憂世にさくの花見てもさこそ歎きは君もつむらめ
けふぞ見る鷺阪山の白つゝじいかで佐保姫染め残しけん
我こひはしほひに見えぬ沖の石の人こそしらね乾く間もなし
秋風は吹き給へども白露の亂れて置かぬ草の葉ぞなき

○初めの句にて結べる例

人しれぬことの葉しげきうもれ水思ふ心をかきながさばや
年ごとにあはれとぞ思ふ櫻花見るべき春のかずもうすれば

○二の句にて結べる例

もみぢ葉の深き色にもたぐふらん歎きのもとにもろき涙は

○三の句にて結べる例

契おきてうゑしもしるくとはに聲をしらるゝ窓の村竹

○四の句にて結べる例

いにしへのみゆきの跡を尋ねれば花と君こそ形見なりけれ

○五の句にて結べる例

待れつる雪げかどこぞ思ひつれいまだ時雨の雪にぞありける

○一首の中いくつも結べる例

うつりゆく雲か嵐の聲すなり散るかまささきのかつらぎの山

○句の中にて結べる例

思ひきや雲のかけはしかりしよりしもが下にて有ん物とは

○下に係りて上にて結べる例

わだつみの豊はた雲に入日さし今よひの月夜あきらけくこそ

○餘意を含めて結ばさる例

かくてのみありその海の在つゝも逢ふよもあらば何か恨みん

○結を接續詞に言ひかけし例

春やとき花や遅きと聞きわかん鶯だにもなかずもあるかな

○一度結びて下に續くる例

○第一の係なきに第一の結を用ふる例

こは多くは「事よ」などの歎息の意を含めるに用ふ、而して多くは和歌に用ひ、又章句の終りに置くを常とせり。

薫りくる花橘の道をわけて忍ぶねを人に知れぬる。(コトヨ)
思ひかね沙干のかたをあされども猶かひもなき浦を戀しき。

行秋のたむけに紅葉ちりまがひ神なび山をともにこゑつる。(コトヨ)

○「何」の下に係詞なき時の結を用ふる例

「何」の下には「る」「なる」と結ぶか正格なるを、和歌にては常の結を用ひて「り」「なり」などとする事多く、又「らん」の意を含めたる常の結を用ふる事あり、

何事にとまる心のあればこそさらにも又世の厭はしき。
もみぢ葉は惜しき錦を見しかども時雨と共に降りてこそ來し。

第三章 普通文

維新以前に在ては人々交通の範圍極めて狭く、士民の交通概ね一町一村若しくは一藩内に限れるを以て、従つて自己の意見を天下公衆に訴へんとするが如き事もなければ、日常の出来事を他に報ずるの必要もなかりしが故に、普通の人々に在ては、日用の書簡文を書き得れば、充分なりとして深く文事を修むるものもなく、故に文章を以て一の閑技藝となし、和漢の學者文章家など言はるゝ一派の人々を除くの外は、好事者流の嗜好に歸し去り、強ち修習するにも及ばざりしは、時世の然らしむる所なりし、抑も我が邦の文章は、王朝時代より鎌倉室町の盛衰浮沈を経て、徳川時代に及び稍や振興せしかども、是とても謂ゆる和學者漢學者各自對峙して、概ね擬古の死文の盛んなりしのみ、我が邦の時文として普通文として、儼然たる文躰あるにあらざりしなり、而して維新の初めに至つては、文運の衰頹其の極に達し、明治十年前

後に於ける文章を見るに、古文に在ては和文漢文ともに大家名家其の人に乏しからざりしも、日常必要なる時文すなはち普通文に在ては、謂ゆる漢學者は纔に乾燥無味なる復文牒をものして、他の無學者流と交通し、謂ゆる洋學者は不完全ながらも直譯文牒と云ふをものして他の無學者流に讀ましむるなど、文運の衰微文章の淆亂を窮めたり、而も文章なるものを一種の閑技藝として、好事者流の嗜好に歸し去りたる往日の風は尙ほ未だ熄まず、随つて普通人に在ては不完全なる文章すら、容易く書き得るもの甚だ少なかりし。

然れども時世の變遷と共に事物も漸く舊態を脱し、文章も亦た慥かに振興の時代となれり、蓋し今日の世は舊時と異にして、社界の交通は日に月に頻繁となり、苟くも爲すある者は廣く天下と交際せざる能はず、一事を創め一業を企てんと欲するもの皆以て廣く公衆に向つて其主義意見の在る所を發露し、或は輿論をも惹き起さしめ、若しくは其の同情協賛を求めざるべからず、而して之れを爲すの方法は、たゞこ

れを筆に載せて、以て廣く公衆の眼前に示すにあるのみ、是れすなはち文章の必要缺くべからざるゆゑにして、特に普通文は處世上最も必要の枝となし人々必ず修習せざるべからざる藝となすゆゑん也。

○第一節 普通文の組織

同じく文章なれども、今日の通用文にあらざる和文漢文、すなはち普通日常の用に適せざる擬古文は、たゞ其の妙貫之清紫に駕し、其の巧、韓柳歐蘇を壓するの伎倆ありといふとも、普通文を修めざる人は、世に通ずる能はざるの人のみ、而して普通文なるものは、嘗に其の用語文牒の時世に適せざるべからざるのみならず、其の意匠思想も亦た陳腐を去り舊套を脱せざるべからざるなり。

さて古文に擬すれば死文となり、今日の文を摸倣すれば淆亂牒を爲さずとすれば、如何なるものを摸範として、いかにして現時日用の普通文をものすべきか、其の方針に迷ふべし、要は古へに泥みて陳腐に陥

らざるにあり、此の事に就ては曾て中村秋香氏が論述せられしもの、頗ぶる其の要領を得たり、今其の一節を左に抄録して讀者の参照に供ふべし。

普通文は元來俗用文、または通俗文と稱せしものにて、これらの文は、もと和漢學者は、その専門文學の範圍外のものとし、又個人としては當時に必要なならざりし爲め、殊更に修學すべきものともなざりしものなりといふ時は、今日これを修學せんとするに於ては、何をもてこれが模範となすべきか、是學者に於て最も深く討究すべき問題にあらざや。そも、普通文なるものは、今日世間一般に通用せる言語、即ち生きて働ける詞を用ひて、今日世間一般に通用し、何人にも能く趣意の了解せらるべき文辭に屬れるものを、これを普通文といふなり、裏面より言へば、擬古辭、又は漢文書下し辭の如き世間一般に通用せざる語、即ち僅かに其の一部分なる専門上のみ働きて、

一般に對しては死して働らざる詞、及びそれらの文辭によりて屬れるにあらざるもの、これを稱して普通文といふ、蓋し言語なるものは、元來人の心に思ふ所を云ひ顯はす爲の符牒のみ、人の心に思ふ所は、世の姿、事物の有様に應じて起るものなれば、即ち其の符牒たる所の言語も、世の姿、事物の有様に從ひて、おのづから移り變らざるを得ざるは、當然の理なり、言語に於て己に移り變る時は、其の言語の續けかた、言回しかたも亦たおのづから移り變るべきは、是亦た當然の理ならずや、そは多言を費すべきもあらず、かの「土佐日記」の文と「方丈記」の文とを對照せば、其の文辭は果していかに文「徒然草」中、擬古辭を除きたる部分、及び「吉野拾遺」の文の類をもて、徳川時代の本居宣長、村田春海、又は新井白石、貝原益軒の如き諸先生の文に比較せば、其の文辭は果していかに、こよなき差なりといふ事は、何人も異論あるまじくこそ。総て歌の上につきても、文の上につきても、此の詞と、姿とは、其

の時世々に随ひて、移り變りゆくさまは、判然としていちじるしき中にも、其の差別の殊に甚しく見ゆるは、奈良朝と、平安朝との間、王朝末と、鎌倉幕府との間なり、一は風土文物の改るに本づき、一は世態風俗の變するに依るものにて、是の自然の勢然らざるを得ざるにいづるなり、殊に明治今日の世の如き、先づ第一王政復古といひ、諸侯の版籍奉還といひ、開港通商といひ、郵便といひ、電信といひ、蒸氣車、蒸氣船、道路、橋梁、築港等の諸工業、近くは日清戦争、及び臺灣征討の事の如き、凡そ内外総ての事柄、いづれか開闢未曾有のものならずといはん、事實に於て既に開闢未曾有の形を顯はすに於ては、人の思想も亦たもとより之れに伴はざるを得ず、人の思想之れに伴はんには、言語に於ても、又其のつけかたに於ても、亦たおのづから之れに伴ひて、開闢未曾有の形を顯さざるを得ずして、現に今日吾人の口にのぼする言語、即ち言葉づかひは、已に開闢未曾有の形を顯せり、さらんには筆に上する言葉遣

ひ、即ち普通文も、亦た同じく開闢未曾有の形を顯はさでは得あるまじき理ならずや。

已に今日の普通文は、開闢未曾有の形を顯はさでは得あらざるものとする時は、古人の文に於てはいかなる名文といふとも、今日の摸範とはなし難しとせんか、さりとて又今日の世に於て、謂ゆる本居、村田、貝原、新井の如き、文學界の泰斗と仰ぐべき大文章家も、猶は未だ聞及ばざるが如く、殊に今の世は日夜に進みつゝある時なれば、甚しくいはんには、去年の文は已に今年の摸範とはなし難く、今日の筆は明日の摸範とはなし難しといふべし、かたゞ此の普通文の上に於て摸範とすべきもの、果してなにかありといはん。或は曰く、今日の文は今日の口語をもて直ちに之れを寫すべし、何ぞ古人に須つ事あらん、いかで摸範に依るを要せむと、是れ畢竟言文一致の論のみ、言文一致の非なるは、已に公論の歸する所あり、今亦た喋々を要せざるべし、然れども古人の文已に摸範となすを得

す、今日の文亦た模範となし難しといはんには、普通文の模範とすべきものは、終に之れを得がたしとせんか、いかで然らん、普通文の模範となすべきものは、全く古人の文にあり、いで其の由を言はん。元來口語、即ち口よりいづる詞と、文章、即ち筆にのぼる詞との差別を問はず、すべて人の思想を述ぶるものは、躰言、用言、てにを、は、の、三をもて組織せらるるものにて、此の三の言辭は其の時世の姿事物の有様に伴ひて、需用のものは自然と出て來り、無用のものはいつとなく廢れ、又は轉輾して變じゆくものなり、一二を例せば、躰言にては郵便、電信、蒸氣車、人力車の類、用言にては確かむ、成るべく、てにをはにては進みつ、あるなどの、然いふのみなどののみの如き、これら皆古へになくして今に出來たるもの、又は古へよりある言辭にして、其の用法を變じたるものなり。右の如く躰言、用言、てにをはの三つが其の時世事物に伴ひ、生死變遷して人の思想を載する器となり、人これを用ひて、もて其の心

に動く所の思想をあらはす、故に其の器の排列巧にして、能く其の順序を得れば、口語の上にては能辯といひ、文章の上にては名文と稱す、排列とは何ぞ、これ即ち組織なり。躰言、用言、てにをはを適宜に配劑してその思想を示す、之れを組織といふ、前にも述ぶるが如く、言辭は勿論、言回し方、屬り方は時世事物に伴ひて、種々轉遷するものなれども、組織に至りては一定不變にして、曾て轉遷することなし、故に作文上に在りては擬古文と普通文との區別を問はず、此の組織を知るをもて最も肝要の事とす。

古人作文の要訣として三多を示せり、此の三多中最も看多を要することは、已に文學界の公論に決せり、是れ他なし、組織の精神を了得せんが爲めのみ。

古文を熟讀する時はその組織、おのづからわが腦裏に默契會得せらるるものありて、物に觸れ神に應じてその組織種々の運用をなし、

謂ゆる思想を載する器を、巧に排列して筆にのぼす、腹稿成りて筆を舐るに當り、筆澁りて意の如くならざるは、其の言はんとする所に於て、組織の精艸いまだ熟せざる所あるに依る。言はんとする所は筆おのづから之れを迎へ、恰も神ありてこれを助くるもの、如く、我ながらあやしきまで筆の舒ぶるを覺ゆるものは、その組織の精神已に熟せるものなり、かくてその筆に上りしものをみれば、全く文牀なれども、その之れを組織せるものは、全く古文の組織より淵源し來れるなり、此の如く古文の組織より淵源し來り、もて今日の姿即ち開闢未曾有の詞をあらはす文となる、今日の普通文はまことに宜しく此の如くならざるべからず、故に普通文の摸範とするものは、實に古文にして、國文講讀は作文上に於ても、亦た甚だ緊要の事といふべきなり。

之れを要するに、文の用たる畢竟口語に代ふるものにて、口語の及びかたき或る部分に於ては、文をもて之れを示すの必要に本づくものなれば、いかなる異狀も、之れを言ひ得ざるはなく、いかなる事情も、之れを述べ盡すを得て、しかも一讀の下、何人にも明かに其の意を了し、詳らかに其の旨を解するが如くならざるべからず、これらの事普通文にあらざれば、決して能くなし得べからず、かの擬古文の如き、専門上に於ては固より修めずは得あるまじきものなれども、其の躰たる、おのづから異狀と事情とを、縦横自在に言ひ顯はし得難き所なきにあらずして、且つ之れを讀むものに於ても、古語古文に通ずる一部分の外は、一般には了解しがたき所あり、一般の人之れを了解せざるが如きは、文の文たる性質を失ふものといはざるを得ず、故に文の文たる性質を備ふるものは、實に普通文にあり、而して普通文の摸範は、實に古文にあり、云々。

と、實に氏の言の如く、普通文は現時一般の人の了解し得べきやう、すなはち今日の詞を以てものせざれば、いかなる巧妙なるものも其の用を爲さざるなり、要するに斬新なる意匠思想をもて、躰言、用言、

てにをはの三つを順序よく排列せよといふにあり、又氏が模範を古文に取れといへるは、古文を模擬せよといへるにはあらず、古文は文法の嚴正なるものなれば、すなはち古文の書き振りを手本として、その如く流暢にして品格あり、雅馴にして雜駁ならざるべくものせよ、しかせば文牀の淆亂迷誤を生ずることなく、謂ゆる時世に適合すべき普通文と稱するを得べしといへるなり。

○第二節 普通文の沿革

我が邦往昔の文章は、漢文若しくは漢字を以て國語を綴りしものにして、大凡普通文と稱すべきものは、假名文字の用廣く行はれしより後にあることは、前已に述べたるが如し、而して假名文字の起りしは、奈良の朝の末にして、延喜の頃に至りては、次第廣く世に用ひられしかども、わきて紀貫之が漢文を骨子とし、法則を漢文に取りて假名文を一振し、其の文牀に一機軸を出せしより、はじめて國文すなはち雅

文は起り、日用の文章雜記は、和漢混淆の言文一致牀を用ひたるなり。是に於てか文章は漢文と和文と通俗文との三種となりしが、爾來即ち平安時代より鎌倉室町の汚隆浮沈を経て、徳川幕府の世に至るまで、幾多の變遷ありしも、三稱相鼎立してさまで混亂雜駁ならざりしも、徳川幕府の末より明治維新の初めに至りては、文運大に衰へ特に普通文は衰微の極に達しぬ、然るに其後社界の交通漸く繁さにおよびて、人々處世上普通文の必要を來し、日常缺くべからざる一の技術とはなりたり、いまその時世によりて變遷せるさまを示さんが爲めに、左に中村惕齋が「古今集」以下七種の書に就て、新たに書き翻へたるもの掲げたり、すなはち古朴なるものを流暢にし、辞の足らざるもの文の到らざるものをば、或は補ひ或は明らかにし、冗なるを削り漫なるを除き、數十百言をも點竄しては數句となし、或は章句段落を變易し、或は前後を相顛倒し、時を隔て世を異にし、作者もとより同じからざる七種七様の文を取り來りて、句調筆法すべて一様文牀に翻せる等、時

世の推移によりて、文辞變遷の氣運を窺ふを得べきのみならず、併せて其の原文と氏の翻文との異なるところに依りて、以て文を作るの工夫を味ひ知るを得べきなり、氏は文化時代の人にして、學は和漢に通じ、その文章も亦た普通文の摸範たるに足れり、

大和の國の女の事 (原文延喜時代のもの) 紀貫之等

風ふけばおきつしら浪たつた山

夜半にや君がひとりこもらむ (よみ人知らず)

或人、此歌は、昔大和の國なりける人のむすめに、ある人すみわたりにけり、此女、親もなくなりて、家もわろくなりゆくあひだに、此男、河内の國の人をあひ知りて、かれやうにのみなりもきけり、さりけれども、つらげなるけしきも見えで、河内へいく毎に、男の心の如くにしつゝ、出しやりければあやしと、思ひてともしなき間にこそ心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、河内へいくまねして、前裁の中にかくれて見ければ、夜ふくるまで琴をかきならしつゝ、

、打歎き此歌をよみてねにければ、是を聞てあはれと思ひて、それより又ほかへもまからずなりにけりとなむ、いひ傳へける、(古今集)

同 (翻文)

中 村 惕 齋

むかし大和の國なりける人のむすめに、ある人すみわたりけり、此女親もなくなり、家もわろくなりゆくあひだに、この男、河内の國に人をあひ知りて通ひつゝ、かれやうにのみなりもきけり、されどもつらげなるけしきも見えで、河内へいく毎に、男の心の如くにしつゝ、出しやりければ、あやしと思ひて、もしなきまには、こそ心もやあると疑ひて、月のおもしろかりける夜、河内へいくまねして、前裁の中にかくれて見ければ、夜ふくるまで琴をかきならしつゝ、打歎きて

風ふけばおきつしら浪たつ田山夜半にや君がひとりもくらむ

とよみてねにければ、是を聞きてそれより、又ほかへもまからずなりにけるとなん、しら浪とはぬす人の事ぞ、此人男のあだ心ある

を防ぐこともなく、かこつ色もなきが、こと心あるかと疑はしきま
 で思はれ、しかのみか男を思ふまことより、男のほかに通ひて、よ
 る山路をゆくことを危ふがりつる、なざけ深きこと限なし、男つら
 くともいかで此のあはれ見すぐし待らん、むべこそ外へはまからず
 なり侍りにけれ、古今集にはその人の名を言はざるを、伊勢物語に
 のせられたれば、在原業平と紀有常がむすめとの事と、後には言ひ傳へ
 ける、(比賣鑑)

原文はもとより歌の註解なるゆゑに、歌をはじめに掲げたるを、翻文
 は、普通の記事文となしたれば、歌の位置をばかへて文中にさしはさ
 めるなり。

下野國の女の事(原文天曆時代のもの) 作者詳かならず
 下野國に男女住みわたりけり、年比住みけるはどに、男妻をまうけ
 て、心變りはて、この家にありける物をも、今の妻のがりかき
 拂ひ持て運びいく、心憂しと思へど猶させて見けり、塵ばかりの物

も残さず皆持て往ぬ、唯残りたるものは馬槽のみなんありける、そ
 れをこの男の従者真楯といひける童を使ひけるして、この槽をさへ
 取りにおこせたり、この童に女の言ひける、さんちも今は此處に見
 えじかしなぞいひければ、なぞてか候はざらん、ぬしおはせずとも
 候ひなんなぞ言ひ立てり、女ぬしに消息聞えば申してんや、文はよ
 に見たまはじ、たゞ詞にて申せよといひければ、いとよく申し候は
 んと言ひければ、かくいひける

ふねもいぬまかぢも見えし今日よりは

うき世の中をいかで渡らん

と申せと言ひければ、男にいひければ、物かさふるひ往にし男なん、
 しかながら運び返して、もとの如くあからめもせで添ひ居にける、
 (大和物語)

同 (翻文)

中 村 惕 齋

むかし下野の國に、男女すみわたりけり、年頃住みけるはどに、男

ほかに妻をまうけて、心變りはて、此家にありける物どもを、今の妻のがり掻きはらひもて運びいく、「心うしと思へせさせて見けり、塵ばかりの物も残さず皆もていぬ、たゞ残りたる物は馬のふねのみなんありける、それをも此男真楫といひける童を使ひけるして、此ふねをさへ取りにをこせたり、此わらばに女のいひける、ぬしに消息聞えば申してんや、文はよみ給はじ、たゞ言葉にて申せといひけるに、いとよく申し候はんと言ひければ、かくいひける

ふねもいぬまかちも見えじけふよりは

うき世の中をいかでわたらむ

と申せと言ひけるを、男にいひければ、男此おはれさに堪えず、かき拂ひし物皆運び返して、元の如く添ひ居ける(比賣鑑)

原文もよく分りたる文なれば、わづかに一二句を増減して文意を明らかならしめたり、

鎌田政家が妻の事(原文源平時代のもの)作者詳かならず

鎌田が妻女是を聞き、討たれし所に尋ね行き、我は女の身なれども、全く貳心はなきものを、如何恨めしく思ひたまふらん、親子の中と申せども、我もそこを思ひ侍れ、あかぬ中には今日既に別れぬ、情なき親に添ふならば、又も憂き目を見すらん、同じ道に具したまへとて、しばらくは泣き居たりけるが、夫の刀を抜くまゝに、心もどにさしあて、うつぶし様に伏しければ、貫かれてぞ亡せにける、

忠宗左馬頭を討ち奉る事は喜なれども、最愛の女を殺し、歎きにこそ沈みけれ、景宗頭殿の御首、並鎌田が首を取り、死骸どもをば一つ穴に掘り埋む、「いかに勳功を望めばとて、相傳の主を討ち、現在の婿を害しける、忠宗が所存をば悪まぬ者もなかりけり、安祿山が主君立宗を傾け、養母楊貴妃を殺し、天下を奪ひとりしかども、其の子安慶緒に殺され、安慶緒は又父を殺したるに依りて、史師明に殺されて、程なく祿山が跡絶えぬ、忠宗も行末如何あらんと、人申し侍りき、譜代の家人なる上、鎌田兵衛も婿なれば、義朝の頼み給

ふもことわりなり、情なかりし所存かな、知らぬは人の心なり、(平治物語)

同 (翻文)

中村 惕齋

平左の亂に、義朝は左馬頭たり、そのさぶらひ鎌田左兵衛尉政家が妻は、尾張の國長田庄司忠宗が女なり、義朝六波羅のいくさに打まけて、あづまの方に落行き、尾張の野間の莊内海につきて、忠宗がもとに入る、これ義朝の世々の家人にて、政家が舅なりけるが、忽ちに心變りして、その子景宗とともに相謀り、義朝を湯殿の内にて討ち、政家をも内に呼び入れ、酒しいるましにて斬りたり、此の妻も父が許にありけるが、是を聞きて、政家が殺されし所に行き、死骸に伏しかゝりて歎きける、我はそも此のあらましを露知らずして父の一言の諫めをだにもせざりき、いかに恨めしくや思すらん、よみちにてこそ言ひわけ申すべけれどとて、政家が刀をぬき、胸元にさしあて、うつぶし様に伏して、つらぬかれ死にけり、おとこの恨み

をいためるのみ非ず、父ありても君をうち婿を殺せるはどの者なれば、猶ほはた如何なる憂き事や聞くらんと思ひてかくなれる、心のうちいとおはれるかな、その後頼朝卿世に出られし時、忠宗父子は誅せらる、政家が女ありけるをば呼出して、尾張丹波のうち二箇の莊を給ひけるとかや、(比賣鑑)

原文に安藤山の故事を出せるは、例證としては的確ならで、かへつて煩はし、なれどもそは此の頃の物語文の僻習なるがもるに、惕齋氏之れを省きたるは、當然のことといふべきなり、

高陽院内親王の事(原文鎌倉時代のもの)作者詳かならず

高陽院の姫君と申すは、鳥羽院の御女美福門院の御腹なり、この宮の御とり子にて、その御先を頼み給ひけるに、はかなくかくれさせ給ひける、宮の内の御歎きは、譬へん方なかりけり、御わざの夜、人々参り集りたりけるに、御簾の内に聊も人の泣く氣色聞えざりけり、隆秀大納言未だ殿上人の時、参られたりけるが、殊に感じ申し

て、いみじき事かなと言はれけり、「物を歎くも悦ぶも、氣色にても
てあまるは、けしからずあるわざなり。」高陽院の御さまは、あまり
に男遠くて、男女ならび居たる繪がける扇をば、捨てられしなど、
かへりて世づかさまに嘲けれども、深く昔ひたらん方は、いみじき
ためしと申すべし、(十訓抄)

同 (翻文)

中村 楊 齋

むかし高陽院太子内親王と申しけるは、白河院の姫君、堀河院と同
じ御腹なり、「此宮は、鳥羽院の姫みて美福門院の御腹にいできさせ
給へるを、養はせたまひて、御行末をたのませ給ひけるが、此姫君
はかなくかくれさせ給ひける、宮の内の御歎きは、譬へて言はん方
なかりけり、御わざの夜、人々参りたりけるに、御簾の内には、い
さゝかも人の泣く氣色聞えざりけるを、隆秀の大納言いまだ殿上人
の時、参られけるが、殊に感じて、いみじき事かなと言はれけり、
高陽院の御事、あまりに男遠くおはしまして、男女ならび居たるか

た、繪にかけける扇をだに取捨てたまひけり、人かへりて世づかぬさ
まに嘲り侍りしかど、物深くむかしびたるかたは、いといみじきた
めしにぞ申しけるとかや、「それ物を歎くも悦ぶも、けしきにもて餘
りたるは、大やう心をもて鎮めざる人の、何事もはなしくけし
からぬよりある事なり、人に後れたる時なとも、あやしの賤の女な
どが物なげきたるさまにて、隣里までも、かくてはいかでたへなん
どばかり聞ゆれど、一日二目すぎぬれば後にはさりげありつるをだ
に思はれぬこそ、あさましけれと、むかしの人の辞しけり、殊さら
男女並び居たる寫し繪をだに、見ぐるしと思しけるは、御本性いか
ばかりまほに潔くおはしけるにやと、いとめでたし、古の班婕妤が
成帝を諫めまわれしも、その心あるに近し、(比賣鑑)

原文は簡なれども文辭古晦にして、往々解しがたきふしあるもるに、
章句を前後にし、また少しく其の意を敷演し、古事を引き来りもして、
意義を明瞭ならしめたるものなり。

小督局の事(原文鎌倉北條の末時代のもの)作者詳ならず

小松殿薨じ給ひて後は人の心さまざまに替り、不思議の事のみ多し、今又此君のかくれさせ給ひぬるも國の衰弊なり、人の歎きなり、御病の付かせ給ふ事も入道の悪行の至り、戀の御病とこそ聞えし、櫻町中納言重範卿の女に小督殿とて、世に類なき美人、琴の上手にて御座しけるが、冷泉大納言隆房卿の未だ少將にて見初給ひし女房なり、少將彼の形勢を傳へ聞きて忍びの玉章を遣はされけれ共、女房なびく心もおはせざりけるを、度々文を送られける程に、年月も隔たり三年にもなりぬ、玉章の數も積りければ、小督殿流石情に弱る心にや、終には靡き給ひけり、少將見そめ給ひて幾程もなかりしに美人の聞えありて内へぞ召され進らする、少將はつきぬ志しなれ共勅命力及ばず、飽かぬ別れの涙には、袖しほたれてはしあへず、せめては小督殿をよそながらも一目見奉る事もやとて、其事なけれ共日毎に參内せられけり、「此女房のおはしける御簾のあたりを、彼方

此方へたゝすみありき給へ共、小督殿の自から、君に召され進らせなん上は、いかに思ふとも言をもかはし、文をも見すべきに非ずとて、傳の情をだに懸られず、少將もしやとて一首の歌を讀みけり、

思ひかね心のおくは陸奥のちかの鹽竈ちかきかひなし

と書きて引給ひ、御簾の内へぞ入れ給ひける、小督殿さしも志深かりし中なれば、取上げ返事をもせばやとは思し召せ共、君の御爲御後めたしとて、手にだに取きて見給はず、急ぎ上童にたびて、坪の内へぞ出されける、少將情なく恨めしく思はれけれ共、人もこそ見れとて、取りて懷に入れて出られけるが、又立歸り給ふ、

玉章を今は手にだにとらじとやさこそ心に思ひ捨つとも

と口遊み宿所に歸り、今は憂き世にながらへて、互の姿を相見ん事も有難し、生きて物を思はんより、只死なばやとぞ泣き給ひける、中宮と申すは御女、少將は婿なり、二人の婿を小督殿にとられ給ひ太政入道安からず腹を立ち給ひ、いやいや此事小督があらん限は、

此世の中よかるべしとも覺へず、急ぎ召出して亡ふべしとぞ誓り給ひける、小督殿此由傳へ聞き給ひ、我難面くながらへて、君の御爲御心苦し、いづくの所にも、身獨りこそ如何にもならめとて、あゝる夕暮に内裏を潜に忍び出で、かき消すやうに失せ給ひぬ、君は聞食し、御腦とて夜のおとせに入らせ給ひ、夜は南殿に出御ありて、月の光を窺覽ありてぞ慰ませ給ひける、太政入道此事を聞き給ひ、君は小督殿故に思召し入らせ給ひけり、其義ならば御介錯の女房達一人も付進らすなとて、中宮をば六波羅へ行啓なし進らせ、參内せられける臣下達をも妬み申されければ、入道の權威に恐れて參り寄る人もなし、禁中さびしくならせ給ひ、いと御思ひ深かりけり、比は八月十日餘りの事なれば、さしも陰なき月なれども、御涙にくもりつゝ、朧に照らす空なれや、小夜更人静まりて、主上、人やある參れ、人やあると召されければ、御いらへ申す者もなし、折節彈正少弼仲國忝りたりけるが、隔たる所にて是を承はり、仲國と御

いらへ申す、近く參れ仰せ下すべき御事ありと勅定ありければ、御前に參る、目近く召して、如何に汝は小督がゆゑを知りたりやと仰せければ争でか知り進らせ候ふべきと奏す、重ねての仰に、誠やらん小督は、嗟峨の邊に片折戸したる所にありとばかりは聞召し、かども、其あるじの名をば知らず、かゝらましかば兼て委しく聞し召すべかりけるぞとよ、汝主が名をば知らずとも、尋ねて進らせてんやと仰せけるに、嗟峨は廣き所にて、名を知らずしては争でか尋ね進らせ候ふべきと申せば、君誠にもとて、聽て御涙に咽ばせ給ひけり、仲國見參らせて、忝けなく悲しく思ひ、實や小督殿の琴彈き給ひしには仲國召されて必ず御笛の役に參りき、其琴の音はいづくにても慥に聞知らんずる者を、今夜は名にし負ふ八月十五日の月の夜なり、折節空も陰なし、君の御事思し召し出て、琴彈き給はぬ事よもあらじ、嗟峨の在家廣しといへども、思ふに幾程か有るべき、王事盛ることなし、打過ぎて琴の爪音を指南として、なぞか尋ね逢

ひ進らせざるべき、縦ひ今夜叶はずば、五日も十日も伺ひ聞きなん、博雅の三位は、三年まで會坂の藁屋の軒に通ひつゝ、流泉啄木の曲を聞きてもこそ有りけれと思ひければ、叶はざるまでも尋ね進らせん、若し尋ね會ひ進らせて候ふとも、御書なくては、うはの空にや思し召され候はんすらんと申しければ、君實にもとて、よにも御嬉しげに思し食し、御書遊ばして仲國に給ふ、程も遙なり、寮の馬に乗りてと仰す、仲國明月に鞭をあげて、西を指してあこがれ行く、八月半の事なれば、路芝に置く露の色、月に玉をや瑩くらん、我ならぬ、在原業平が男鹿啼くその山里と詠じけん、嗟峨のあたりの秋の比、さこそは哀に覺えけめ、片折戸したる所を見付けては、此内にもや御座すらんと、ひかへく聞きければ、琴弾く所もなかりけり、打廻りく二三返まで聞きければ、我のみ疲れて甲斐ぞなき、内裏をばよにも憑もしげに申して出でぬ、さて空しく歸り参りたらば、なかく参らざるよりも悪かるべし、是より何方へも落行

145 女 道 普

かばやと思へども、いづくか王土にあらざる、身を隠すべき宿もなし、さて又君の御歎き、誰人か慰め進らせんと思ひければ、只狩衣の袖を絞りて、良久しくぞたちやすらふ、是より法輪は程近ければ、そも参り給へる事もやとて、かなたへ向きてあひませ行く、龜山のあたり近く、松の一叢ある方に、幽に琴こそ聞えけれ、峰の嵐か松風か、尋ぬる君の琴の音かと覺束なく思ひ、駒をはやめて行く程に、片折戸の内に琴をぞ彈澄したる、手綱をゆるべて聞きければ、少しも違ふべくもなき、小督殿の爪音なり、樂は何ぞと聞きければ、少しを想ひて戀ふと讀む、想夫戀と云ふ樂なり、仲國急ぎ馬より飛び下り、用状ぬき出し、ちと合せて立寄り、門をほとくと叩けば、琴をば弾きやみ給ひけり、内裏より仲國御使に参り侍り、開かせ給へ、御氣色申さんといへども答ふる人もなし、良ありて鎖をはづし門をはそめにあけて、いたいけしたる小女房、顔ばかり指出し、人違ひ歎所違ひ歎、あやしき賤が庵なり、さやうに内裏より御使給はるべ

き所に侍らずと云ひければ、仲國なかくとかく返事せば、門たて
 鎖して悪かりなると思ひければ、押開てぞ入りにける、妻戸の
 縁により居て申しけるは、いかにやうの御住居にて御座し候ふや
 らん、君は御故に思し召し入らせ給ひ、つやつや供御も聞し召さず
 打解け御寝もならせ給はねば、御命も危く見えさせ給ふ者をや、か
 やうに申し侍は、うはの空にや思し召さるらん、御書の候とて取
 出して是を奉る、有りつる女房取次きて、小督殿に進らする、急ぎ
 披き見給へば、げにも君の御書なりけり、哀に忝けなくおぼしけれ
 ば、御書を顔にあて給ひ、いかにせんとぞ泣き給ふ、さらぬだに馴
 れにし夜半の睦言は、思ひ出でつ、悲しきに、雲井の空の月影に、
 涙の露ぞ置きまさる、仲國が待らんも、心苦しく思ふらんと思し召
 し、御返事あそばし引結び、女房の装束一重取副へ、簾のそとへ推
 出さる、御形見かと覺えて哀れなり、仲國給はりて、左の肩に打懸
 けて申しけるは、餘の御使にて候は、御返事の上は兎角申し入る

へき身に候はねども、内裏にて御琴あそばされし御笛の役には、仲國
 こそ召されしが、其奉公をばよも御忘れあらじ、いまだ御忘れ候は
 ずば、御返事を直に承はりて奏聞申さばやと聞えければ、女房誠に
 もやと思し召しけん、近く居出で宣ひけるは、さればこそ其にも聞
 き給へる様に、入道の世にも怖しき事共申と聞き侍りしかば、難面
 く存へて我も憂目を見ば、君の御爲も御心苦し、いづくのいかなら
 ん所にて、我身一人こそ消え失せなると思ひ、内裏をば潜に忍び
 出でぬ、いかならん浦河にも入り、如何にも成るべかりしかども、
 住馴れし人々の行末をも聞き、今一度君の御言傳をも承はると思
 ひ、所縁ありて是に此程侍りつれども、傳を承はる事もなし、思へ
 はなかなか身も苦し、明日よりして大原の別所に思ひ立つ事候ふて
 今夜を限りの名残を惜み、主の女房に勧められ、手馴れし琴が忘ら
 れで、今夜しも弾てこそ、安くは聞知られぬれやとて泣き給ひけれ
 ば、仲國も表の衣の袖を絞るばかりに成りにけり、良有りて申しけ

るは、大原の別所と承はるや御様をかへんとや、御免されなくては争でか御姿をも替へさせ給ふべき、如何様にも重ねて御使に参り候はんずらん、縦ひ出でんと仰すとも、左右なく出し進らせ給ふなと、彼家の主の女房に申し置き、召具したる馬部吉祥を二三人留め置き、彼家を守護せさせ、我身は内裏へ馳参り、内裏をば亥の刻計りに出たれども、通夜嵯峨野の原に迷ひつゝ、秋の夜長しといへども、内裏へ歸り参りたれば、夜はほのくど明けにけり、君は定めて御寢こそ成りたるらめ、誰してか奏し入るべきと思ひ、装束をば驛の障子に打懸け、寮の御馬をつながせて、南殿の方にさし廻りて見進らすれば、未だ入御もならざりけり、夜部の御座にましく、待ち兼やせ給へりと覺えたり、仲國が参るを御覽じて詩一つ詠じさせ給ひけり、

南翔北嚮、難附寒温於秋雁、
東出西流、只寄膽望於曉月、

と御詠ありけるに、仲國尋ね會ひ参らせて候ふとて、御返事をぞ指上げたる、急ぎ披いて御覽あれば、げにも小督局の手なりけり、穴無慙や未だ憂世に有りけるや、何としてか尋ね會ひたりけるぞと御氣色ありければ、御琴の音にと申す、如何なる樂をか弾きつると有りければ、想夫戀をこそあそばされ候ひつれと奏すれば、朕が事忘れず思ひ出しけるにやとて、又御涙をはらくと流させ給ふぞ哀れなる、誰してか召さるべきなれば、汝歸りて具して参れとぞ仰せける、仲國承り御前を立ちけるが、恐し、太政入道に聞付けられ、如何なる目にかわはんずらんと思ひけれども、綸言なれば争でか背き奉るべき、縦ひ召出され首を刎ねらるゝとも、いかゞはせんと思ひ、宿所に歸り牛車支度して嵯峨に参り、御氣色のよし申しければ、小督殿、我れ再び憂目にあはんより、此次にこそいかにもならめと宣ひけるに、主の女房共に様々誘へ申しければ、泣くく内裏へ歸り給ふ、君斜ならず御悦びありて、或る局に召置かせ給ひけり、其御

腹に姫君一人出来させ給ひけり、後に坊門の女院と申し、は、彼姫君の御事なり、平家の方様をば深くつゝしませ給ひけるに、入道何と申して聞き付け給ひけん、源大夫判官をめして、や、季定、小督失せたりとは君の御虚言にて有りけるぞ、未だ内裏に候ふなり、急ぎ召出して失ふべしとぞ宣ひける、季定承り、所縁を以て小督殿をすかし奉り、入道にかくと申しければ、さすが女なほを失はん事は世の聞えも穩便ならず、たゞ姿を替へて追放て、さて君は思召し捨てさせ給はんずると宣ひければ、季定承り、目もあてられず思ひければ、東山の麓清閑寺と云ふ所に具足し奉り、姿を替へさせ奉る、翡翠の衣をやかなるを剃下し、花色衣の御袖を、うき世を外の墨染衣に替へけるこそ悲しけれ、此を見奉りける人、上下袂を絞りけり、今は疾く御心に任せとて、在所も定めず追放つ、此女房と申すは大織冠の御孫、淡海公には一男、武智鷹より十二代、故少納言入道信西の孫なり、かく龍顔に近づき進らす上は、國母后に

祝はれ給はん事も難かるべきにあらず、平家は下國守をたにきらはれて、只今家を起したる人ぞかし、さまでの振舞情なしとぞ人唇を返しける、櫻町中納言は、最愛の女子をかやうにせられ給ふ、如何にすべしとも思ひ給はねば、しばし籠居とぞ聞えける、冷泉少將此由聞き給ひ、あな無慙や、さては終にさまたげられにけり、尋ね行き訪はゞやと思はれければ、入道のかへりさかん事を恐れて、思ひながらさてやみ給ふ、新尼御前は、出家は本より思ひ儲けし事なれども、敢無く人に姿をかへられて、如何なる事かを思はれけん、さして行くべき方も覺えねば、泣く々々嗟峨へ歸り給ふ、暫く爰に御座しけるが、後には大原の別所に閉籠り、行ひ澄し給ひけり、御年廿三歳、しかるべき形なり、主上に間召し、朕天子の位にて、これ程の事を勸慮に任せぬ事こそ安からぬ、と思召されければ、世に披露はなかりけり、深く思召し出られたる時は、只御惱とて夜のおどいへ入らせ給ひけり、小督の局の心ならず尼になされたる所な

れば、御なつかしく思召されけるにや、朕をば必ず清閑寺へ送り納めよと、御遺言の有りけるこそ、御愛執の罪と云ひながら哀れなれ入道は斯る悪行し給ひて、流石おもはゆるや思はれけん、福原へ下り給ひにけり、(源平盛衰記)

同 (翻文)

中村 惕齋

高倉院の宮人に小督の局といひけるは、藤氏少納言入道信西がむまご、櫻町中納言重範卿のむすめなり、かたち世にすぐれ、琴の上手もかくれなし、殊に其心ばへすなほにて慈悲深く、つねねたげなる心なかりけり、つねづ言ひつる事に曰く、このみてあやしき事語るは、必ずその心正しからぬ人のいふ事なり、たゞ常ならんぞ萬つたがふ事なしと、君これを聞しめされて、その御覺えいよく淺からずなりにけり、内に宮づかへ侍りしあひだ、朋輩の女房に情をかくることねんごるに、すべて他人をもりたて、下つ方のあやまちをも、身にかへて救ひけること度々なり、心ざしのありがたき事言は

ん方なかりけるとかや、此時の中宮は、太政入道淨海のむすめなり小督に中宮の寵を奪はれし事をば安からず思ひて、引出して殺さばやなと言へりけるを、局さへて、わが身はいかさまにもなるべけれど、君の御爲いかゞあらんの恐れありと、ひそかに内をしのび出で、嵯峨にかくれ居て、さまかへんとしたりけるを、主上より又しのびて召しければ、力なくてふたゝび参りけり、されど入道もれ聞きてつひに局を引出し、東山清閑寺にて尼になして逐放つ、後には小原の別所にとちこもりて住みけり、尼になりける時も、まだ年は二十三なりしとぞ、(比賣鑑)

此の原文はもと作者が物語文として、ものしたるなり、さればいと面白く書きなしたれども、淨海を主として當時その専横を極め、君をなみし奉り弱きを虐たげし有様をながくと記したれば、小督の局が上は客なるをば、中村氏はそを書き替へて、小督の略傳となせしものなれば、主客を顛倒し文もいと短く約めたり、さはいへその人の身の上

については略ぼ盡くせり、文を修むるもの士は兩々相對照せば、おのづから行文の妙を窺ひ知るを得べきなり、

松下禪尼の事(原文南北時代のもの) 兼 好法師

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける、守をいれ申さるゝ事ありけるに、すゝけたるあかり障子の破ばかりを、禪尼手づから小刀して、きり廻しつゝはられければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、給はりてなにがし男にはらせ候はん、さやうの事に心得たる者に候ふ、と申されければ、その男尼が細工によも勝り侍らじとて、猶一間づゝはられけるを、義景皆をはりかへ候はんは遙にたやすく候ふべし、斑まだらに候ふも見苦しくや、と重ねて申されければ、尼も後はさはしくとほりかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり、物は破れたる所ばかりを修理して用ゆる事ぞと、若き人に見ならはせて、心づけためなりと申されける、いとありがたかりけり、世を治むる道儉約をもとす、女性なれども

聖人の心にかよへり、天下をたもつ程の人を、子にもたれける、誠にたい人にはあらざりけるとぞ、(徒然草)

同 (翻文)

中村 惕 齋

鎌倉の執權北條相模守時頼の母、性は藤原、尼になりて後松下禪尼とよぶ、ある時守を請せられけるに、煤けたるにあかり障子の破ばかりを、禪尼みづから小刀して、切まはしつゝはられければ、せうどの城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、給はりてなにがし男にはらせ候はん、さやうの事に心えたる者に候ふ、と申されければ、その男尼が細工には、よもまさり侍らじとて、猶一間づゝはられける、義景皆をはりかへ候はんは、遙にたやすく候ふべし、斑に候ふも見ぐるしくや、と重ねて申されければ、尼も後にはさはさとはりかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり、物は破れたる所ばかりを修理して用ゆる事と、若き人に見ならはせて、心づけんためなりと申されける、天が下まつりこつ人の親

なれども、奢を好まずして、かくいみじき心ばせのありけるは、その家の式目に、小破の時且修理を加へよとある事を、子孫に守らせ、無用のつひへをいましめられむ爲にとや、まことにおぼろけならぬためし也。禪尼は藤九郎盛長が孫、城介入道覺智がむすめなり。時頼を後には最明寺殿といひて、改正しく國治まり、世の覚えめでたき人にてありけるも、此人の子なればなるべし、(比賣鑑)

原文が平易にして流暢なるをもて、僅に五六の文字を増減せしのみ、而も結尾の端ともいふべき數句は、原文に準據すべきにもあらざれば、已が意見に書きかへられたるものなり。

小楠公が母の事(原文室町時代のもの) 作者詳かならず
湊川にて討れし楠判官が首をば、六條河原に懸られたり、(中略)、
其後尊氏卿、楠が首を召して、朝家私日、久しく相馴れし舊好の程も、不便なり跡の妻子とも、今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける、情の程こそあり難けれ、楠が後室

157 文 通 世

子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様々申し置きし事ども多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出しを限りの別なりとぞ、かねてより思ひ儲けたることなれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、變りはてたる首を見るに、悲みの心胸に満ちて、歎きの涙せきあへず、今年十一歳になりける帯刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母がなげきのせん方もなげなる様を見て、流るゝ涙を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に抜き持ちて、袴の腰を押し下げて、自害をせんとし居たりける、母急ぎ走り寄りて、正行が小腕に取りつきて、涙を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しといへり、汝をさなくとも父が子ならば、是程の理に迷ふべしや、小心にも能く、事のさまを思ひて見よかし、故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の驛より返し留めしことは、全く跡をと

ふらはれん爲に非ず、腹を切れとて殘し置きしにもあらず、我仮令
運命盡きて、戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、
死残りたる一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅
して、君を御代にも立て進らせよといひ置きし處なり、其遺言具に
聞きて我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや、かくては父が
名を失ひはて、君の御用に合ひ進らせんことあるべしとも覺えず、
と泣くく諫め留めて、抜きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得
ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける、「其後よりは正行
父の遺言、母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、ある時は童部共を打
倒し、頭を取るまねをして、是は朝敵の頭をとるなりといひ、ある
時は竹馬に鞭をわて、是は將軍を追懸け奉るなんといひて、はかな
き手ずさみに至るまでも、只此事をのみわざとせる、心の中こそ恐
ろしけれ、(太平記)

同 (翻文)

中・村 惕 齋

建武の末に、楠判官正成津の國兵庫の湊川にて討たれぬ、かねてよ
り此度のいくさを最後と思ひ定めければ、その子帶刀正行十一歳に
なりけるを、櫻井の宿より返しけり、「正成うたれて後、尊氏卿その
首を故郷に送られしかば、妻子家人ども、正成の兵庫に赴きし時
ひ置ける事共によりて、思ひまうけし事なれども、今その首の色變
り目塞がりたる有様を見て、胸悶え心くらみて、涙の色もかはるば
かりなり、「正行は流るゝ涙を袖に抑えて、持佛堂の方へもきけるは
母怪しみてしたひ行きつゝ見れば、父がかたみに留めおさける菊水
の刀をぬきもち、袴の腰を押下げて、すでに自害せんぞす、「母走り
よりてとりつき、涙とゝもにいひ聞えける、梅檀は二葉より芳しく、
頻^{ひん}迦の鳥は卵^{たまご}より諸鳥に優るといへり、なむぢをさなくとも父の子
ならば、なまかばかりに惑へる、なむぢ小心にも能く思ひ見よ、故
判官殿兵庫へ赴きし時に、汝を櫻井の宿より返し留められたるは、
跡とふらはん爲にしもあらず、腹切れとの事にしもあらず、正成運

命盡きて討死すとも、主上いづ方におはしますと承らば、残りたる一族郎黨共を扶持し置きて、軍を起し、朝敵を滅し、二たび主上を御世に立てまゐらせよと言置かれしを聞きて、我にもねんごろに語りつるが、いつの間にかは忘れたるぞや、さる心ざしにては、父の名を失ひ、君の御事にも立つまじきぞ、と諫め止めて、刀を奪ひとりければ、正行は禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ伏沈みける、其後より正行、父の遺言母の教訓、心にそめ肝に銘じて、はかなき手ずさび戯れわざにも、朝敵を攻めふせ討取るまねより外の事なし、母かひとくしく育てあげて、一族家人をも懇に情をかきおさけるによりて、正行廿四歳に及びける時、南方より軍を起して打出で、父に劣らぬ武略をなしけるも、「母の方に依りける事と見えたり（比賣鑑）原文は物語文として、よく分り易く書きなしたれば、所々わづかに書きかへ、近文躰と爲せしものなり、兩々相對照して文の訣を悟るべし、以上示したる七種の文の中には、述作の方にも現今の人々には、解釋

161 美 文 學

なくては文辭の分り兼るもの所々にあれども、そは時世の變遷に因りて然るのみ、要するに普通文は、目にて見るも耳にて聞くも、誰れにも容易く意の通ずるやうにものするがよきなり、維新の後は専ら漢文直譯躰の文世に行はれ來る、此の文躰は目にて見るにあらざれば分り難く、されば新聞を見よ、雜報は通俗躰に近きもの、聞くのみにても略ぼ解し得らるれども、論説は漢文躰なるが故に、聞くのみにては意の通せず、義を聞き違へること多し、さればとて年來修得せしもの皆漢文躰にして、我が邦固有の文法を知らざるの人多きをもて、自然漢文躰を用ふるに至る、又彼の開業式及び宴會の祝詞、若しくは諸種の演説などにも、漢文直譯躰又は漢語を用ふることの多きをもて、普通の人々には勿論少しく文字を修めたるものにては、その意義の分明ならざること多々ありて、その後日其の祝詞若しくは演説等の印刷せられたるを見て、漸く其の意義を了解するを往々少しとせず、斯くては折角已れの主義懷抱を公衆に知らしめんとせし苦心も、結果半は徒

勞に屬すべし、されば論說、祝詞、演說其他言語と文章とを問はず、何人にも分り易すからしめんには、成るべく平易にして而も語格を誤まらざることにつとめざるべからず、平易にして語格を正しふせんには、和文を模範として其の文法に則り、而して以て鍛練と工夫とを積むべきなり。

○第四章 美文學

美とはうるはしきなり、うまさなり、美文とは即ちうるはしき文章、うまく書きたる文章をいふなり、されば文詞の自然にうるはしきと、意匠を加へ裝飾を施してうるはしきとを問はず、能く自然の美を寫し出し、能く感情を叙べつくし、讀むものをして美に打たれ感に堪へざらしむるもの、皆此の範圍に屬するものなり。

概して言へば、普通文も美文も等しく文章なれども、これを區別するものは、例令ば吾人が生活上に用ふる器具物品は、實用品と裝飾品との區別あるが如くにて、即ち普通文は實用品にして、美文は裝飾品なりとす、故に普通文にありては、專ばら實用を主とするを以て、平易に明了に、飾らず論はず、何人にも讀み易く解し易からしめ、只管用務を辨ずるを目的とし、又美文にありては、實際と假寓とを問はず、專ばら裝飾を旨とするを以て、優美に典雅に、讀者を感動せしめ、反

覆三誦して倦まざらしめ厭かざらしむるを眼目とするものなり、されども美を好むは人情の常なれば、實用品と雖ども自から多少の裝飾を加ふるは、勢の然らしむる處にして、一見裝飾品に劣らざる麗はしきものあり、又裝飾品と雖ども、半ば實用を兼ねるものあるを以て、其の區別に迷ふものなきにあらず、文章に於ても亦た斯くの如く、往々兩者の區別判然し難きものあれども、裝飾的の文字を用ふる限りは、これを美文の範圍内に入るものとし、美文に屬するものと爲すべきなり。

以上述ぶる如く、美文は實用を主とせるものにあらずと雖ども、たゞ裝飾といへる点にのみ着目して、主義もなく目的もなくものせんか、これ虚飾にして眞の美裝とは言ふべからず、されば仮寓と事實とを問はず、一定の主義目的を立て、正しき文法によりて優美典雅に、以て讀者を感動せしむることに勤めざるべからず。

言文一致駢の論者は、文章なるものは吾人が口にて言ふべきことを、

文字に寫し出すものなれば、事實を有のままに記せば可なり、漫りに美ならしめんこと欲せば、知らず識らず虚飾に陥り、爲めに事實を詭まること少なからずと、此の論一理なきにあられども、試に思へ、文士の演説又は僧侶の説教若しく講談師の講談、落語家の落語の如き同じ事實を論じ、同じ教を説き、同じ談話を爲すに於ても、其の人の辯舌の巧拙に依りて、聽衆を感動せしめ得ると否との差別あるは、何人も能く知る所なるべし、文章に於てもまた斯くの如く、其の思想の貧富と、趣向の巧拙とに依りて、讀者の感情を發揮せしむると否との差別を生ずべし。

辯舌の巧拙、思想の貧富は、吾人が天賦の能力に支配せらるゝものなりと雖ども、天賦の能力もまた自然に發達するものにあらず、多少鈍の差違あるにもせよ、これを修養しこれを練磨するにあられれば、完全に發育し能はざるものなれば、怠らず撓めず、修養と練磨の功を積むべきなり。

○第一節 修養と練磨

世間凡百の事物其の成功を得んことを欲せば、其の成功に必用なる能力の修養を爲し練磨を積まざるべからず、其の修養を爲し練磨を積まんに、先づ其の事物の成り立ちを考へ而してこれを成功せしむるの方法を研究するにあり。

文章に於けるも亦た然り、たとへば一つの記事文を草せんとするに、其の記せんとする事物は如何なる性質のものなるか、其の事物は如何にして成り立てるものなるか、將た如何なる順序に書き爲さば、其の性質及び成り立ちを言ひあらはし得べきか、如何なる文辭を用ひて記さば讀者をして記者の意志を感ぜしめ得べきかを研究せざるべからず、而して其の研究に就て最も必要なるものは、自己の能力を豊富ならしむるにあり。

さて文章を草するに最大要用なるものは、感情、想像、記憶、判断、

趣味、此の五つの能力の富有なるべきにあり。

感情とは、自己の心中に發動せる喜怒哀樂の情を充分に言ひあらはして、これを讀者に傳て其の同情を表せしめ感動せしむることを言ふなり、故に文を書かんとするには、其の書かんとする事物に就て、自己の心中に感得したる情を文字に寫し出して以てこれを讀者に通じ、讀者をして自己と同一なる感情を發起せしむることに勤めざるべからず、然るにこれに反して自己の心中に感得せざる事柄を記して、讀者のみに感情を起さしめんとするは、決して爲し得べからざることなり、斯の如きは徒らに無用の文字を弄する虚飾の文章にして、仮令作者自身のみ文辭の巧みなるを誇るも、讀者は少しも感動することなく、却つて其の浮華を倦厭するの情を起さしむるに止まるべし、されば文を草するには、一字一句と雖ども作者自身に其の事物に對して感じ得たる事實を記して以て讀者に其の感情を傳ふべきなり、古來世人に持て難やし、文章を見るに、孰れも其の感情を巧みに描し出して、少しも浮

華虚飾の事柄を記せざるに因る、然るに世人は往々其の文辭の流麗なるを欲して、感情の如何に意を用ひざるものあり、斯の如き文は一見巧みなるが如きも、読み去り読み來る毎に、其の浮華虚飾の点は發見せられ、遂には人のこれを手にするものなきに至るべく、これに反して作者自身に感じて書きたるものは、一句一章感情を以て充たされ、讀者も直接に其のものに對するの思ひありて、再讀三誦するも厭くことなく倦むことなかるべし、故に文章の巧みなると否とは、感情を讀者に傳ふるの上手なると否とにあるものなりとす、次に

想像とは、現在の出來事を根據として未來の出來事を思ひ遣り、或は有る事柄を種として無き事柄を思ひ遣るの能力を言ふなり、たとへば人類間に於ける恩愛よりして、これを禽獸に及ばし、彼等も其の情に於てはかはるまじと想像し、若しくは現世の人情風俗を種として、天上界なる假空世界を作り出す等、すべて自己の思ひ遣りの心を推し擴めて、種々様々の幻影を描き出し、讀者をして其の假空なるを知りつ

いも、想像よりする時は斯くあるべき事なるべく、或は斯く事柄も有る事ならんと思はしむるの方法なり、此の想像の能力の富有なるに於ては、單純なる記事を書くにも、種々に其の想像の幻影を描き出して、讀者の感情を動かすには、尤も有力なるものなれば、巧妙なる文を作らんと欲せば、宜しく此の想像の能力を豊富ならしむるやう勉めて怠らざるべからず、次に、

記憶とは、目に見耳に聞きたる事々物々より、其の事々物々に對して自己の胸中に生じたる思想を、心に記して忘れず且つ順序よく思ひ出す能力を言ふなり、たとへば、一の景色を書かんとするに、目に見えたるものには、山あり川あり人家あり草木あり人あり禽獸あり虫魚あり、山は岩石巖々として雲表に聳え、川には藍の如き水を湛へたる淵白雪を飛ばす如き急湍あり、人家は所々に散在して白壁丹壁燦然たるもの柴門茅舎の清楚なるもの相映帶し、翠綠滴らんとする如き常盤木紅紫絢爛たる花卉、牛を追ふの牧童、野に放てる馬、田を耕やす農夫、

道を行くの旅人、草花に戯むるの蜂蝶、天に朝するの雲雀、泡沫に喰
 喝するの魚簇等あり、耳に聞ゆるものには、風の香水の響き、鳥の囀
 る犬の吠る、其の他人の談笑する聲もあれば歌謡絃吹の聲もあるべく、
 而して是等を見聞せるに就て自己の心に生じたる感想もあるべきなり
 以上混雜せる幾多の材料を一まとめとなし、これを簡単に流暢に順序
 よく分り易く、一篇の文に描し出さんには、記憶力の慥かなるにあら
 ざるよりは、到底能し得べかる事ならずや、されば記憶力の修養は、
 尤も怠るべからざるものなりとす。次に

判断とは、事々物々を比べ見て、此れと彼れとは相適合すとか、甲と
 乙とは相背けるとかの辨別を爲して、これを取捨應用するの能力を云
 ふなり、たとへば、今潔白なる心を記さんには、青天、白日、霽風、
 朗月、雪霜などの材料を撰びてこれを比照し、亂雜なる事を記さん
 には、盤根、錯節、落花、風塵などの景物を撰ぶが如く、其の潔白なる
 心と青天とを比べ、亂雜なる事と風塵とを比べ見て、果して相應せる

や否やを判断するが如く、すべて其の記さんとする事柄と其の胸中に
 聯想せる材料景物が、相一致して其の言はんと欲する處の感情を發揮
 せしむるに足るや否やを觀察取捨して、これを適當に用ふる事これな
 り、此の判断なる能力を有すると有せざるとは、文の巧拙の依りて分
 る、一大要点なりとす。次に

趣味とは、事物に對して能く觀察を遂げ、細かく意を用ゐて、其の性
 質を咀嚼し、其の美妙なる趣きを味ひ分くるの能力を言ふなり、たと
 へば金銀珠玉を鑄め種々の色彩を施したる物は、美は乃ち美なりと雖
 ども、此れ等は普通人の眼に映じたる表面的の美にして、眞の美術な
 りとは言ふべからず、眞の美と稱するものは決して斯る点のみを言
 ふにあらず、其の金玉を鑄めたる否と、色彩を施せると否とに關は
 らず、自然の美を備ふるものをいひ、又曲藝、練り人形、活動寫眞の
 如き演藝は、妙は乃ち妙なりと雖ども、此れ等は少年子女を怡ばしむ
 るに過ぎずして、眞の妙とは言ふべからず、眞の妙と稱するものは決

して斯る表面的のものゝみにあらず、眞に其の情を寫し實を摸するの点にあるものなるは、何人も能く知れる所なり、されば趣味といへるものは、普通人の耳目に映ずる以外に、特種なる美妙の点を見出す能力を言ふものなりとす、庭に植えたる梅も溪間に生せる梅も一見花に異なる点なし、然れども其の趣味に於ては自から相異なるものあり事々物々皆な斯くの如し、特に文章の上には此の趣味なるもの最も大關係を有して、讀者の感情を刺撃するの多少は、即ち趣味の深淺に因るものなれば、事物の趣味を觀察してこれを描し出すの能力を修養することに勉めざるべからず、

以上に述ぶる所の諸能力は、何人と雖も多少具有せざるはなし、併しながら若し其の能力の天性に任せたらんには、到底深遠微妙なる眞美を發見することは難かるべし、されば苟しくも文學に心を寄するものは、殊に此の結能力の修養を怠るべからず、すべて自身にはこれを完全具備せりと信するものにて、他より見る時は必らず其の缺点を

見出ださるゝものなり、

さて此の諸能力の修養するには、多く古今の名文を読み、又自から多く作りて以てこれを比照し、其の優所と劣所を明らかにし、其の優所は取りて以て他日の材料に備へ、其の劣所は意匠を凝らし工夫を積んで、これを改竄訂正し、謂ゆる練磨研鑽して怠らず撓まざるにあるなり

○第二節 取材と着想

見るもの聞くもの一として文の材料にあらざるはなし、されどもこれを用ふるには大に注意を要すべきなり、特に美文に於ては猶更なるべし、たとへば貫之、清、紫の文は巧妙にして美の粹を蒐めたるものなりとて、其の妙味は如何にして成り立てるか、其の美趣は如何にして組み立てられたるかを、熟考觀察せずしては、我が文を作るの模範とは爲るべからざるなり、故に如何なる事如何なる物にても、其の事物の妙所と美趣とを取りて巧みに之れを應用せざるべからず、例へば老

練なる庭作りが庭園を築くが如く、普通の人においては何等の用をも爲さざる、謂ゆる有り觸れたる一木一石にても、彼れは能くこれを用ひて一簾の用に立て、庭園の風致を添ゆるが如く、其の事物の形状性質等を能く見分けて、巧みにこれを應用すれば、事々物々一として材料とならざるはなきなり、文章の取材も亦これと等しく其の材料を用ふるの巧みなると否とに因て、或は名文ともなり又は拙なき文章ともなるべきなり、されば文の材料を取るには能く其の事物の美妙なる点を發揮し、其の眞美眞粹を蒐めこれを工合能く組み立て、美趣充ち満ち妙味溢るゝが如きものと爲さざるべからず、誰れしも文を作るには美趣充ち妙味溢れ讀者をして一唱三歎せしめんことを欲せざるものあらん、然れども斯る巧みなるものを作り出す能はざるは何が故ぞや、蓋し是れ材を取るに着想の宜しきを得ざるに由るなり、特に美文にありては尤も此の点を重しとするが故に、若しも着想宜しからざれば如何に美なる文詞を用ふるも、如何に裝飾を施

すも、到底眞美眞粹なるものは成り立さざるなり

さて着想とは如何なることぞといふに、甲の觀念と乙の觀念とを比べ見て其の關係を判定するの謂にして、すなはち彼れと此れとの關係を相背き相離れしめざるることなり、文詞と事實とを程能く和合せしむることなり、例へば「生を喜び、死を哀しむ」の「文詞を用ひんには、「生」とは如何なることぞ、「喜」とは如何なる情ぞといふことを考へ、「死」とは如何なることぞ、「哀」とは如何なる情ぞといふことを究めて、其の詞が兩々相一致するや否やを判し定むべきなり、若しこれに反して彼此の觀念が相背き相離るゝが如きあらば、如何に其の文詞を修飾するも、徒らに外見の美なるのみにして趣味もなく精神もなき虚飾の空文たるに止まるべき也、されば文章を作るには最も着想に注意せざるべからず、而して其の注意すべき最も緊要なる点は、虚偽を避くべきこと、曖昧を忌むべきこと、すなはち言ひ換れば、正實にして明瞭ならんことを要す、例へば

忍ぶれど色に出でにけり我戀は物や思ふと人の問ふまで
 といふ如く、戀愛の切なる情は如何なる忍びて人に知らしめざらんと
 すれど、自然に色に顯はれ出るものなり、色に顯はるゝが故に人が其
 の色を見て何か心に物思ひがあるかと問ひ尋ねる様になる、此れを戀
 愛の切實なる情より出でたる歌にして、少しも虚飾なる点なければ、
 讀者も眞正に感動して同情の念を起すべし、然るを

戀しさを心一つに忍ぶれば物や思ふと問ふ人もなし、

と言はゞ如何ん、讀者はさまざまに同情を表せざるべし、何となれば切
 なる戀愛は如何に忍ばんと欲するも忍び得べきにあらず、忍べば必ら
 ず色に顯はるゝは自然の道理なり、さるを色にも顯はさず忍び得らる
 ゝ如きは、未だ眞正切實なる戀とはいふ能はざるもの、故に到底深く
 讀者を感動せしめ同情を表せしむることは出來ざるなり、されば
 文詞は如何に面白くも、若し着想の缺点すなはち正實を缺き虚偽浮華
 のものならんには、結句讀者をして不快又は嫌厭の思を生せしむるを

免れざるものなり、

逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔しは物を思はざりけり

の歌は、未だ逢ひもせず見もせざりし以前には、如何なる美はしき人
 なるか、如何なる心の人なるか、常に絶えず心に思ひ居たりしも、一
 度逢ひ見ての後は、其の美はしき氣高き容貌の夢現にも眼前に散らつ
 き、其の清らかに妙なる音聲の耳に残りて忘れんとすれど忘れ難き物
 思ひに比ぶれば、大なる相違にて今の心苦しきより言へば、逢ひ見ざ
 る以前は物思ひが無かりしといふても宜しいの意にして、逢ひ見ての
 文字は昔しに對し、比ぶればの文字は前後の句を關聯せしめて、能く
 其の愛慕の情の哀れに切なるを表彰して餘りありといふべし、又謠曲
 鉢の木の修行者の詞に

未だ日は高く候へ共、餘りの大雪にて前後を忘れて候程に、一夜
 の宿を御かし候へ、

といへるは、如何にも雪の降りしきりて前後も見え分かず、難澁なる

様を想像するに足る實直なるものなり、然るを今「大雪にて」の文字を「大雨にて」と變へんとせば實直を失はんことは無論なるべく、虚偽といふ不快の感覺を讀者に與へんこと必然なり、其の他「冬は寒く、夏は暑し」と言ふが事實なるべきを「冬は暑く、夏は寒し」と言はんか、すなはちこれ事實に反せるものにして虚偽なるが如し、是れ等は何人も能く知れることにして、固より無用の言の如くなれども、総して別り切つたることなればとて等閑に附し置く時には、初學の人々には思はざるの誤謬を招き、圖らざるの迷ひを生ずることなきにしもあらず、謂ゆる知らず識らずの間に、事實に背離するの文詞を用ひ、虚偽の誹りを受くべきなり、例へば、我が日本にあつては、春は暖かに夏は暑く、秋は冷やかに冬は寒く、四時の氣候はそれ／＼に區別あれども、印度の如き國にあつては、我國の冬の如き氣候は、夢にだも知る能はざるべし、さるを此の氣候の相違あるに心附かずして、冬期印度に在る友人の許へ送る書狀に、「朔風肌を劈くが如く互寒指を落さん」とす

るの候貴兄寒さの御障りも無之哉」と認め遣らんか、これ我が國の氣候に對比しては、事實を背かざる真正の觀念なれども、印度といふ觀念を以て對比せば、全然相背離して實直を失ひたるものにあらずや、これは假設の一例に過ぎざれども實直の重んずべきを思はざるときはこれに類するの誤りを生ずるのみならず、一層甚だしき迷路に陥るの弊あるは、初學者の文章には固より、一廉有名なる文士のものせられたる文中にも或は里程の遠近若しくは方位を誤り、或は其の位置を顛倒せるが如きは、往々にしてこれ有るを見る、是れ等は孰れも皆事實直を重んぜざるの結果といふべきなり、事實を真正に記すべきことは既に述べが如し、然れども尙ほ心得べきことは、其の事實を記するに就ても、野卑ならず猥雑ならず不徳非情の着想を避け、讀者をして眞實に同情同感の念を起さしむることに注意せざるべからず、たとへば湖海の水の渺茫汪洋たるも、洪水の氾濫横溢して人家田園を流亡せる水の渺茫汪洋たるも、一見同様の觀な

ればとて、湖海の壮大雄觀なるを賞讚するの文詞を以て、洪水の氾濫を記せんか、讀者はこれを何とか言はん、必らずや記者を目して無情慘刻なる悪魔と爲さん、さればたとへ實際を記するに就ても、其の事實の眞想を吟味して、徳義に背かず卑猥に陥らず、優美に高尚にして讀者の同情同感を惹き起すべくものせざれば、美文の名稱を下すを得ざるものなるを覺悟すべきなり、

又文章は前にも屢々述べたるが如く、自己の思想感情を他に知らしめん爲めのものなれば、何人にも解し易き様明瞭ならざるべからず、初學の人々の文章は兎角錯雜混亂に失し易く、其の目的の在るところを知り難きのみならず、彼此の區別の立ち難きもの少なからざるものあり、たとへば甲乙二人の對話を記するに、其の言葉の混同して何れか甲、何れか乙なるを知るに苦しむことあり、又自己には明瞭の意思ありて認めしことも、其の文詞に讀者を誤解せしむべき比喩若しくは無用の文字ありたる爲めに其の明瞭を缺くことも少なからず、或は文句

を聯續せしめんとして意味の解し難きに至るものあり、此れ等の事實は多く作者の不注意より生ずるものなれば、文に志す人は常に能く注意して明瞭を缺かざらんとを務むべきなり、然らざれば如河に自己の感情を他に傳へんと欲するも到底他を動かし得べきにあらず、殊には自己の心に能く感せざるをば、讀者にのみ能く感せしめんとするは、猶ほ木に縁りて魚を求むるの類と言はざるべからず、而して讀者を能く感せしむべき方法は、着想の實直と明瞭を土臺として、而して其の感情を言ひ顯はすに、自然にして美麗に、高尚にして微妙なる文詞を用ひることを熟練するにあるなり、すべて文章は、世上に有りとあらゆる有形無形の事物の、直接に間接に自己の心に感得せるものを描し出して他人の同情を求むるものなれば、現實の事柄は固より現實ならざる事柄をも、自己想像の能力と判断力とに由りてこれを描し出し、他人をして現實の事は自から其の事物に直接相對して見聞するが如く感動せしめ、現實ならざる事も成る程道理上斯くあるべき事なり、こ

れを事實とするも間然する所なしとの同情を表せしむるを主眼とす、是れすなはち虚偽ならず無理ならず自然に言ひ顯はすの方法なり、然るに世人は稍もすれば奇を衒ひ妙を競はんとするの野心より、小説にまれ物語にまれ、實際に有り得べからざる不自然なる事柄を事々しくものして、以て讀者の好奇心を満足せしめ其の陽采を博して得々たるものあるが如し、成る程これ等は一時小人婦女子を驚喜せしむるを得るも、決して永遠に其の愛讀を望むを得ず、況てや有識の士は一見以て不快の感を起し其の卷を掩ふに終るべきなり、故に文は成るべく順序と自然を失はざる様に爲すべきなるを忘るべからず、又美麗とは汚なき穢はしきといふの反對にして、すべて人の耳目を樂ましめ心を喜ばしむるもの、すなはち其の文詞によりて美麗なりとの感情を起さしむるを得べき様に述べ認むることなり、

紫もわけもつらなる庭の面にまだ緑なる玉柳かな(源三位頼政)
 さえ渡る光りを霜にまがへてや月にうつらふ白菊の花(藤原實隆)

梅が枝に降りつむ雪は鶯の羽風に散る花かぞを見る(左京大夫顯輔)
 これ等の歌を見よ、いかに清らかに麗はしきか、讀む人の氣もすみ身も匂ふ心地すべく、露、青柳、月、菊、梅、鶯などは固より清らかなるもの麗はしきもの香り良きものには相違なきも、此の歌を吟せば一入清らかに麗はしく香ばしき心地のせらるゝなり、又

藻鹽やく烟とのみも見ゆるかな海士の苦屋に立る蚊遣火(源經信)
 五月雨にたく藻の烟うち濕りしほれまさる須磨の浦人(藤原俊成)
 の歌を見よ、實際に漁村の有様を見れば汚なくいぶせきものなれども、斯く吟ずれば何となく床しき心地して、汚穢なるものも清らかなる様に思はるゝなり、

一概に美文は美麗ならざるべからずと言へば、醜きもの汚なきことは書くことを得ずして、其の區域甚だ狭く思はるゝなれども、苟しくも文としては其を厭ふて書かざれば、實際を描し出すこと能はず、到底不自然と虚偽とを免かれ難かるべし、されば美麗といふは右様の事物

を拘束するの言葉にはあらず、唯々醜くさきもの汚きものも、其を明白に言はずして行文の中に隠し置くことなり、たとへば

今日は某寺に法會のありたれば、朝まだきより詣でしに、道の邊りに蟹の目を剥きたる如き盲人、髪は脱け落ち顔も手足も紫色に腫れ、爛れ膿液の流れ出たる癩病漢、髪はおどろに亂れ荒布の如き切れ〜の襤褸を身に纏ひ垢と塵にまみれ汚れたる男女の乞食など、多く集ひて往來の人に袖ひかばかりに近よりて物乞ふにぞ、其うるさきのみかは心弱きものは嘔吐を催さるべき汚なさ言はん方なく、我は其の厭はしさに視を瞥げ顔に袖を掩ふて、辛うして走り脱けぬ。

と書かんに、實際には相違なけれども美といふ点を缺けるものなり、故にこれを、

今日は某寺に法會のあるなれば、朝まだきより詣でしに、道の邊りに見るもいふせきさま〜の不具者乞食など多く集ひて、往來

の人に物乞ふことの厭はしさに、我は若干の錢を投げ與へ、彼れ等が其を争ひ拾ふひまに、辛うして走り脱けぬ、

と記さば、其の汚醜なるを言はずして、文中自から其の意を含むを見るべし、されば美麗といふことは、美はしきものは一層麗はしかるべき詞を用ひ、醜く汚きものも、其の事實を明白に言はずして、他の詞の中に其の意を含ます様にすべきことをいふなり、次には

高尚にして微妙なるべきことなり、高尚とは上品なるの謂ひ、微妙とは普通人の言ひ得ざる奥床しく氣高きをいふものにして、美文をものするには成るべく文詞の卑しからぬ様に品よく神々しくすべしといふことなり、たとへば舞妓と良家の處女とに一樣の美裝を爲さしむると仮定せんに、其の美麗なるは優劣なきが如くなれども、其の品格に至りては日を同うして語るべからず、或は美の点のみより言へば舞妓は處女に幾分優ることあらんも、其の品格の点に於ては數等の下にあるべきなり、されば文章も美は固より缺くべからざるべきなれども、美